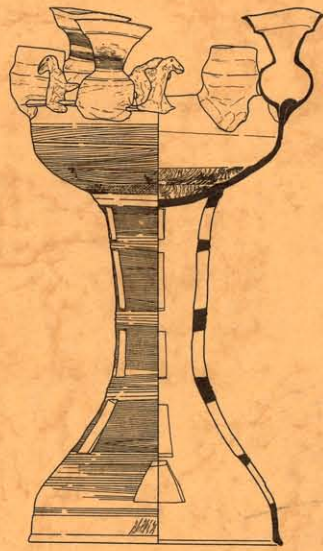


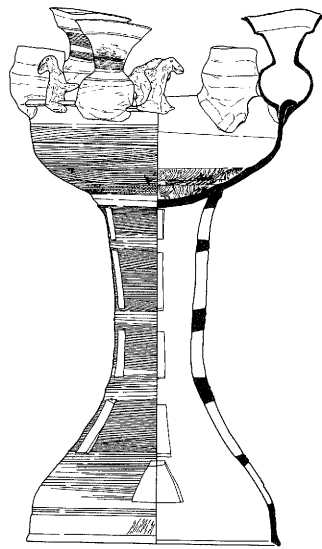
高安古墳群
大 石 古 墳



1995年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

高安古墳群
大 石 古 墳



1995年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

は し が き

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中心部にあたります。古くから人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれらの先人が残した貴重な文化遺産が数多く遺存しております。

近年、都市開発が進み各種土木工事等が増加するなか、これらの文化財を破壊から守ること、また記録保存し後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第であります。

この度、平成2年度に実施しました高安古墳群大石古墳の調査報告書を刊行する運びとなりました。高安古墳群は八尾市の東部、生駒山西麓に所在する群集墳で、その規模は大阪府下はもちろん、全国でも屈指のものであります。調査では、横穴式石室内から、須恵器装飾器台・鉄刀・馬具などの貴重な副葬品が多数出土いたしました。これらの遺物整理・保存処理等が完了し、調査成果を明らかにするものであります。本書が学術研究の資料として、また文化財保護への啓発に広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、この発掘調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なる御理解と御協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層の御理解・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成7年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

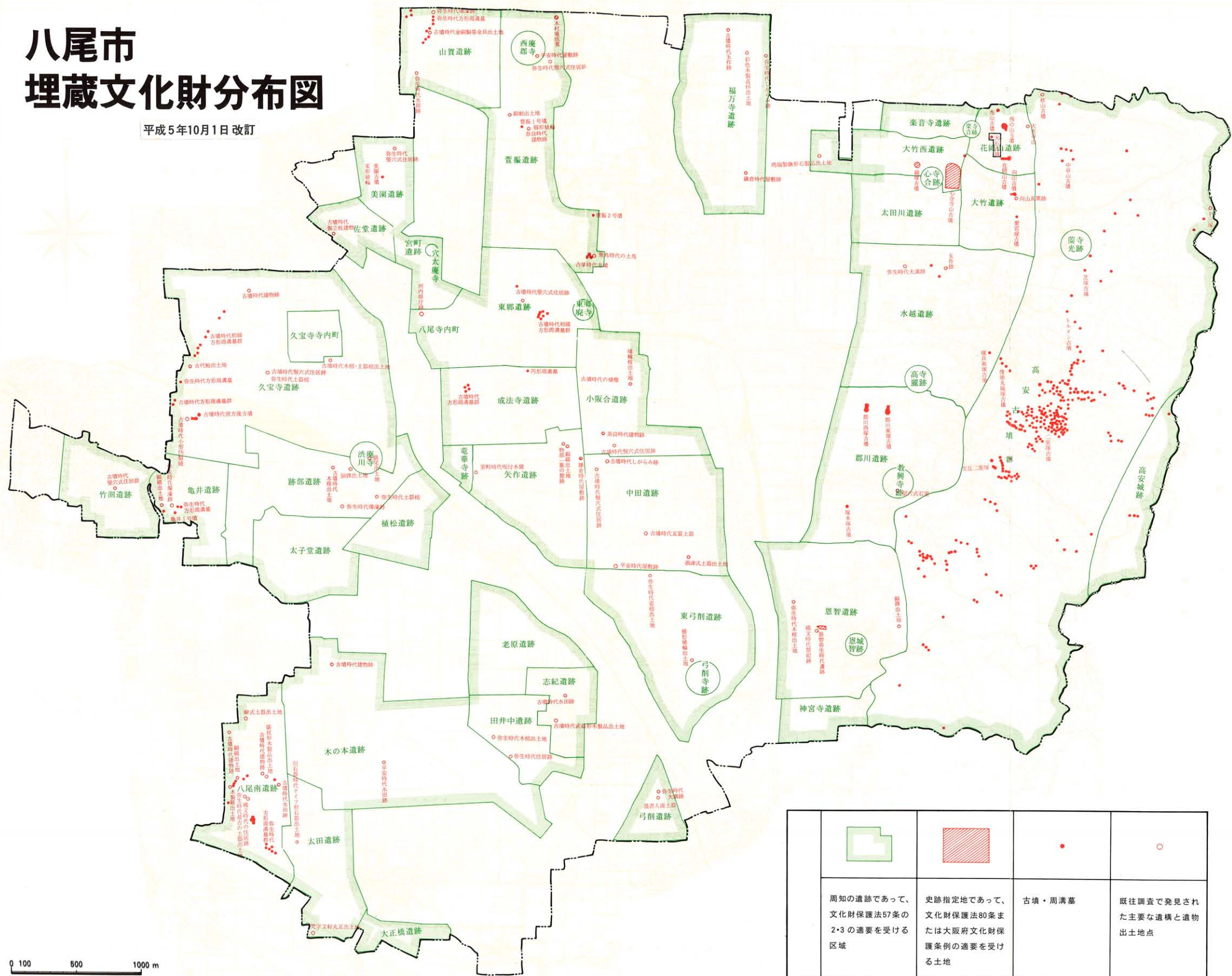
理事長 木 山 丈 司

例 言

1. 本書は、八尾市楽音寺6丁目29で行った学生寮建設に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第63号 平成2年7月30日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が、辻本工務店(株)から委託をうけて実施したものである。
1. 調査は、当調査研究会 坪田真一が担当した。
1. 現地調査は平成2年8月7日に着手し、9月3日に終了した。調査面積は80m²である。
1. 内業整理は現地調査終了後に着手し、平成7年3月をもって終了した。
1. 現地調査には、岡田聖一・荒川和哉・坂下 学・濱田千年・正木洋二・森本浩一の参加を得た。
1. 内業整理には上記の他、成海佳子（調査員）・岩本順子・田島和恵・都築聡子・宮崎寛子・村井俊子・村田英子・山内千恵子・横山妙子・若竹慶弘の参加を得た。
1. 本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行い、遺物観察表を主に田島が作成した。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の2,500分の1（昭和61年8月発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成5年10月1日改訂）を使用した。
1. 本書で用いた標高の基準はT.P.（東京湾標準潮位）である。
1. 本書で用いた方位は、現地実測図と2,500分の1地図から起こした座標北を示している。
1. 遺物実測図の断面は須恵器を黒とし、他は白とした。
1. 調査に際しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。
1. 出土鉄製品の保存処理・X線写真撮影は（財）元興寺文化財研究所に委託した。

八尾市 埋蔵文化財分布図

平成5年10月1日改訂



周知の遺跡であって、文化財保護法57条の2・3の適受を受ける区域	史跡指定地であって、文化財保護法80条または大阪府文化財保護条例の適受を受ける土地	古墳・周溝墓	既往調査で発見された主要な遺構と遺物出土地点

本文目次

はしがき

例言

八尾市埋蔵文化財分布図

第1章 調査経過	1
第2章 周辺の地理的・歴史的環境	2
第3章 調査概要	4
第1節 調査方法	4
第2節 古墳の立地	4
第3節 墳丘	5
第4節 埋葬施設	6
第5節 出土遺物	12
第4章 出土遺物観察表	27
第5章 まとめ	31
報告書抄録	33

挿図目次

第1図 調査地位置図 (S = 1 / 5000)	3
第2図 調査区設定図 (S = 1 / 200)	4
第3図 2・3トレンチ平・断面図 (S = 1 / 100)	5
第4図 石室平・断面図 (S = 1 / 50)	7 ~ 8
第5図 石室展開図 (S = 1 / 50)	9
第6図 玄室内木棺平・断面図 (S = 1 / 20)	10
第7図 石室遺物出土状況平面図 (S = 1 / 40)	13
第8図 玄室遺物出土状況平面・見通し図 (S = 1 / 20)	14
第9図 羨道遺物出土状況図 (S = 1 / 20)	15
第10図 玄室出土遺物実測図① (S = 1 / 4)	16
第11図 玄室出土遺物実測図② (S = 1 / 4、1 / 2)	17

第12図	羨道出土遺物実測図 (S = 1 / 4、1 / 2)	18
第13図	鉄刀実測図 (S = 1 / 6、1 / 2)	19
第14図	武器類実測図 (S = 1 / 2)	20
第15図	馬具実測図 (S = 1 / 3、1 / 2)	22
第16図	鎧実測図 (S = 1 / 2)	23
第17図	不明鉄製品実測図 (S = 1 / 1)	24
第18図	繫結具実測図 (S = 1 / 2)	25

表 目 次

表 1	出土遺物一覧表	12
表 2	耳環観察表	26

図 版 目 次

図版 1	石室全景 (南西から)	
	石室全景 (南西から)	
図版 2	玄室敷石 (南西から)	
	羨道敷石 (南西から)	
図版 3	敷石除去後石室全景 (南西から)	
	奥壁 (南西から)	石室 (北から)
	玄室西側壁 (南西から)	玄室東側壁 (南西から)
図版 4	玄室西側壁北部 (南東から)	玄室東側壁北部 (北西から)
	玄室西側壁南部 (南東から)	玄室東側壁南部 (北西から)
	玄門西側壁 (南東から)	玄門東側壁 (北西から)
	玄室西側壁裏 (北西から)	玄室東側壁裏 (南東から)
図版 5	玄室遺物出土状況 (南西から)	
	玄室木棺検出状況 (南西から)	
図版 6	玄室遺物出土状況 (南西から)	
	玄室遺物出土状況 (西から)	

- 図版 7 玄室遺物出土状況（西から）
玄室遺物出土状況（北東から）
- 図版 8 玄室北東部遺物出土状況（上が北西）
玄室中央東部遺物出土状況（上が北西）
- 図版 9 玄室遺物出土状況（南西から）
玄室遺物（14・91）出土状況（上が南東）
- 図版 10 玄室遺物（89）出土状況（上が南東）
玄室遺物（17・82～84）出土状況（上が北西）
- 図版 11 羨道遺物（36）出土状況（北から）
羨道遺物出土状況（北東から）
- 図版 12 羨道遺物（32）出土状況（南東から）
羨道遺物（30）出土状況（南東から）
- 図版 13 玄室遺物出土状況復元（西から）
3 トレンチ全景（南から）
- 図版 14 出土遺物（土器）
- 図版 15 出土遺物（土器）
- 図版 16 出土遺物（土器）
- 図版 17 出土遺物（土器）
- 図版 18 出土遺物（土器）
- 図版 19 出土遺物（耳環・鉄刀）
- 図版 20 出土遺物（武器）
- 図版 21 出土遺物（馬具）
- 図版 22 出土遺物（馬具）
- 図版 23 出土遺物（緊結具）
- 図版 24 出土遺物（X線写真）

第1章 調査経過

平成2年、辻本工務店(株)より、八尾市楽音寺6丁目29における学生寮建設の届出書が、八尾市教育委員会文化財室（現文化財課）に提出された。これを受けた同文化財室では、当該地が周知の遺跡範囲内にあることから遺構確認調査を実施した。その結果横穴式石室が検出され、ただちに事業者と古墳保存のための協議にはいった。そして協議期間中は文化財室により石室の規模および墳丘範囲確認のための事前調査が行われた（平成2年7月25日～8月1日）。

協議の結果、建物の基礎構造上、現状保存が不可能となり、文化財室では発掘調査による記録保存が必要であると判断し、事業者にその旨を通知した。そして、発掘調査を実施することが両者で合意され、調査にあたっては、事業者・文化財室・当調査研究会の三者協定により、当調査研究会が主体となって実施することとなった。なお文化財室では、石室所在地の小字名から当古墳を大石古墳（T90-GO）と命名した。

今回報告する調査は前述の文化財室による事前調査に引き続き実施したものである。調査開始時の石室の状況は、転落天井石が除去され、石室内埋土は遺物検出面までの掘削が終了しており、また石室東側の断ち割りトレンチ、及び北側の攪乱坑が掘削されていた。なおこの事前調査の報告書は八尾市教育委員会よりすでに刊行されているので参照されたい。^{註1}

こうして調査を開始するに至ったが、調査に先立って平成2年8月6日には現地において慰霊祭を行った。また同年9月1日には周辺の住民を対象に現地説明会を実施し、約150名の見学者が来訪した。



慰霊祭



現地説明会

第2章 周辺の地理的・歴史的環境

大石古墳の位置する八尾市の東部、生駒山西麓一帯は、丘陵地や小規模な扇状地が複雑に融合した地形を呈している。扇状地扇端部から沖積地には縄文時代からの遺跡（恩智遺跡・花岡山遺跡・楽音寺遺跡・水越遺跡等）や弥生時代からの遺跡（郡川遺跡・大竹西遺跡等）が営まれている。また古墳時代では前期から終末期の古墳が確認されており、これらは総称して高安古墳群と呼ばれている。（八尾市埋蔵文化財分布図参照）

高安古墳群ではこれまでに大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会等による発掘調査や古墳分布調査が行われており、多くの成果が得られている。ここでは高安古墳群の概要について簡単に述べる。

北部地域の「楽音寺・大竹古墳群」は、古墳時代前期の西ノ山古墳、中期の花岡山古墳・中谷山古墳（中ノ谷古墳）・心合寺山古墳・鏡塚古墳、後期の愛宕塚古墳と、長期間にわたって継続的に形成された古墳群である。心合寺山古墳は全長約130mを測る中河内最大の前方後円墳であり、国の史跡に指定されている。愛宕塚古墳は府下最大規模の横穴式石室を有する古墳である。これらのことから「楽音寺・大竹古墳群」を形成した集団の安定した勢力が推察されている。

後期～終末期では、山畑地区・服部川地区を中心に、6世紀後半を築造のピークとする小規模な円墳（直径10～25m、高さ3～5m）が密集する群集墳が形成されており、一般に『高安千塚』の名前で知られている。高安山山頂には終末期後半の「高安山古墳群」があり、その被葬者については奈良時代初頭まで当地に存続していたとされる「高安城」との関連が考えられている。なおこの生駒山西麓には、高安古墳群の北側の東大阪市域に山畑古墳群、南側の柏原市域に高井田古墳群・平尾山古墳群と群集墳が連なっている。

古墳の数については、近年「高安城を探る会」によって実施された分布調査によると185基（平成2年）が確認されており、古くは540基（大正11年・岩本文一）、216基（昭和41年・大阪府教育委員会）、324基（昭和49年・中田遺跡調査会）という数字が残っている。これらのデータから開墾や石材採取等による古墳破壊の進行が窺える。



第1図 調査地位置図(S = 1 / 5000)

第3章 調査概要

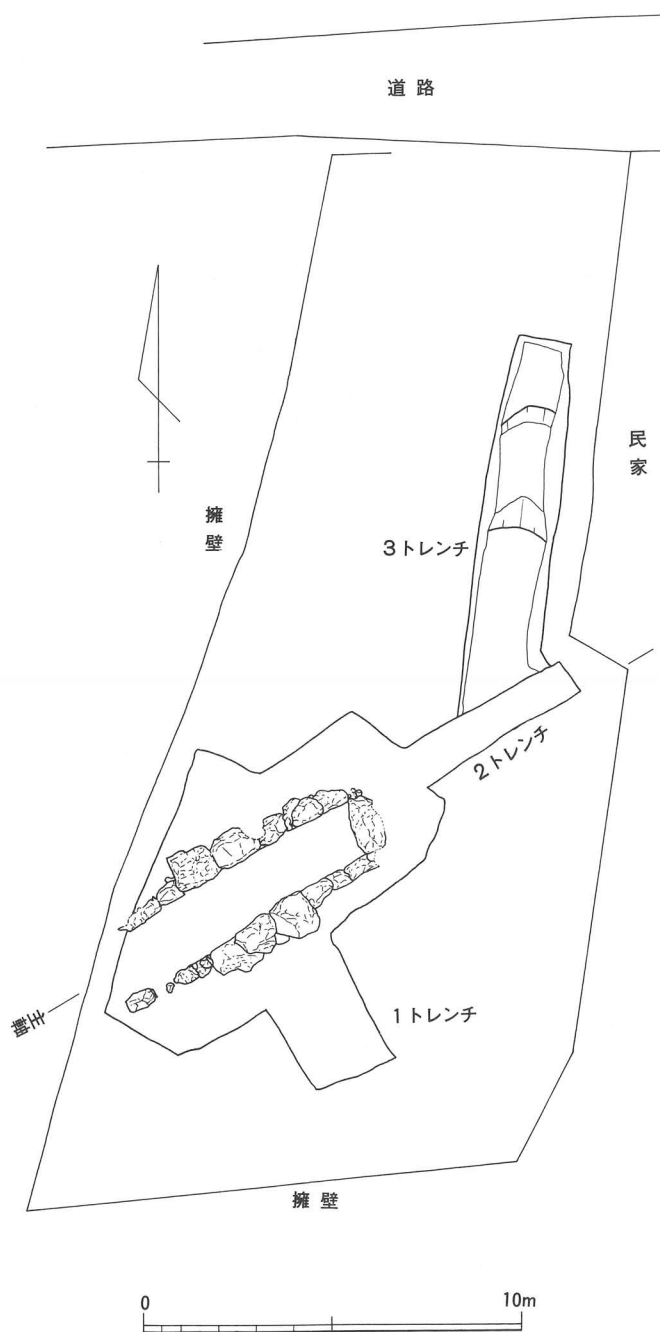
第1節 調査方法

今回の調査では掘削土処理の都合から敷地全面の発掘は不可能であった。このため調査対象となったのは、石室部分、石室主軸に対して十字に設定した断ち割りトレンチ（1・2トレンチ）、及び2トレンチから敷地に沿って南北方向に設定した墳丘確認トレンチ（3トレンチ）である。各トレンチの規模は1トレンチ－9.7m×2.3m、2トレンチ－5.5m×1.1m、3トレンチ－10.3m×2.0mである。

なお調査にかかる掘削はすべて人力で行った。

第2節 古墳の立地

大石古墳は、高安古墳群の中で後期古墳の分布が希薄である北端部に位置しており、最も近い古墳でも数百mは離れている。位置的には「楽音寺・大竹古墳群」の範囲に含まれている。地形的には頂部に前期古墳である西ノ山古墳が築造されている独立丘陵の南西斜面にあたり、標高は約



第2図 調査区設定図(S = 1/200)

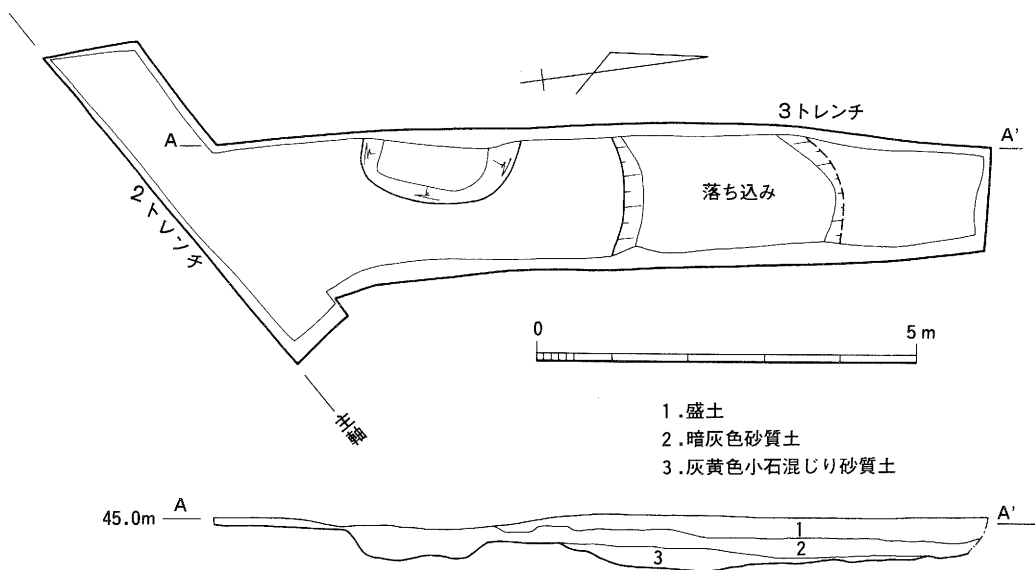
43.7mを測る。西ノ山古墳との距離は約130m、標高差約30mを測る。古墳の多くが標高100m～150mに立地する高安古墳群の後期古墳の中であって、大石古墳はかなり低い位置に構築されているといえる。

第3節 墳丘（第2～4図）

当古墳の調査前の状況は、以前に建っていた建物を取り壊された後、その基礎のコンクリート敷が残った空地であった。文化財室による事前調査ではこのコンクリート及び盛土直下で石室石材を検出している。すなわち石室部分の墳丘盛土はすでに完全に削平されている。トレンチ部分では1トレンチ北壁にみられる第12層～第16層が墳丘盛土である可能性があるものの断定はできない。また第18・19層は地山と考えられるが、第17層よりも若干締まりが悪く、やや疑問が残る。

墳丘規模・墳形等は不明であるが、3トレンチの地山面で深さ約20cm・幅約2.6mにわたってわずかに落ち込みが認められ、これを墳丘裾部と考えることもできる。この場合、当古墳は直径約22mの規模をもつ円墳となる可能性がある。なお周溝は確認されなかった。

文化財室の事前調査における現地形での地形測量では、標高44.05m以上のコンターラインが石室の周りをめぐることが確認されており、当石室は旧地形の高まりを利用して設定され、その後墳丘部分の盛土が行われたと推定されている。



第3図 2・3トレンチ平・断面図(S=1/100)

第4節 埋葬施設

〈石室埋土〉

まず文化財室による事前調査の報告から、石室埋土の状況について簡単にまとめておく。

地表下0.7mまでは攪乱土である。その下は墳丘が崩落した土と思われる暗茶灰色粘砂層が堆積し、近世陶磁器を含んでいる。その下の淡黄灰色粘砂層は、ほとんど近世陶磁器を含まない層であり、この層から副葬品の土器が検出された。

〈石室〉(第4・5図)

埋葬施設は南西に開口する無袖式の横穴式石室で、主軸は北から東に約59度振っている(便宜上、以下の文章では石室主軸を南北方向とする^{註2})。石室構築に際しては、丘陵斜面に掘形を水平に掘り下げている。

石室規模は、全長8.0m以上・玄室長約3.6m・同幅約1.5m・羨道長4.4m以上・同幅約1.55mで、高さは不明である。

石室掘形は平面ほぼ長方形を呈し、奥壁部から羨道部に向かうほど幅が広がっている。規模は全長9.0m以上、幅は奥壁部で約3.4m、羨道部端で約4.6mを測る。断面逆台形で、埋土は東側断面上から灰黄褐色小石混じり砂質土(焼土混じり)・暗灰褐色小石混じり砂質土・黄褐色小石混じり砂質土(黄色粘土をブロック状に含む)・暗黄褐色砂質土である。

石室の南部は溜池の擁壁となっているため削平されており、羨道部の長さは不明である。羨道部南端床面は袋状に落ち込んでおり、盗掘坑の可能性はある。また玄門付近には石室側壁を利用した平面2.2m×1.7m、石室上部からの深さ約2.1m、床面からの深さ約0.9mを測るごく近代の攪乱坑が掘られている。

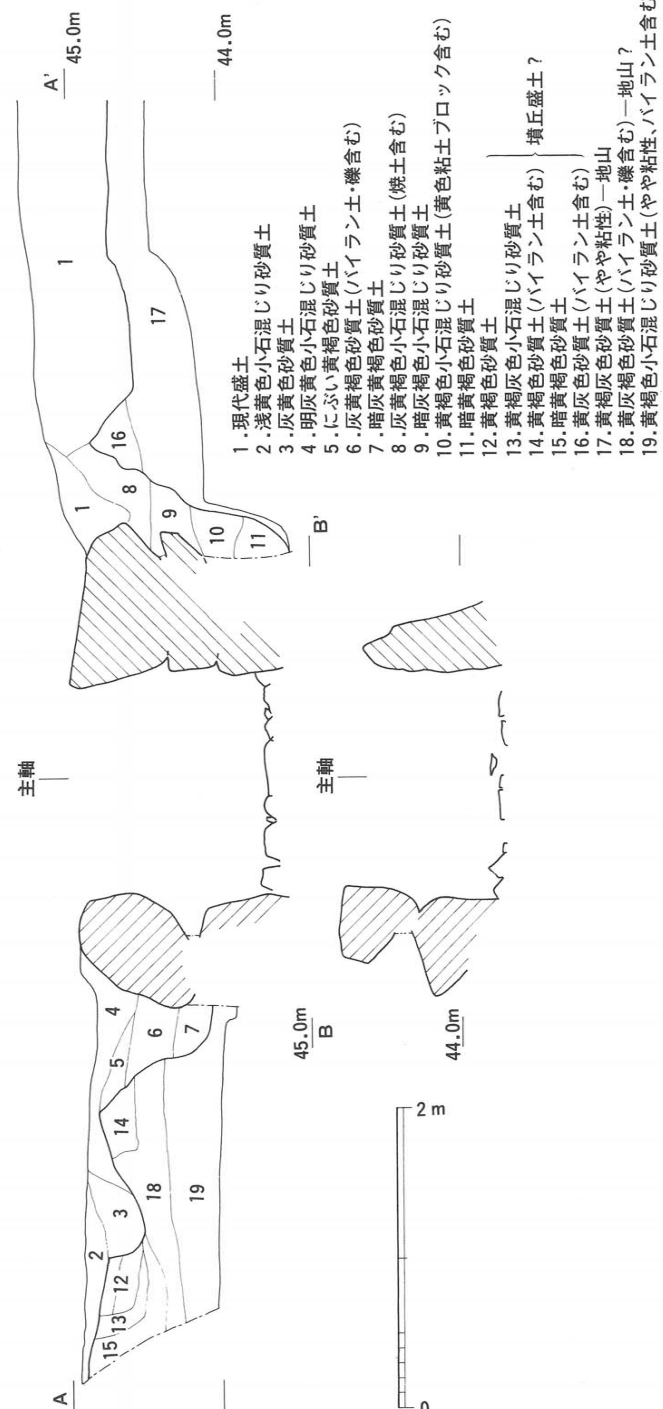
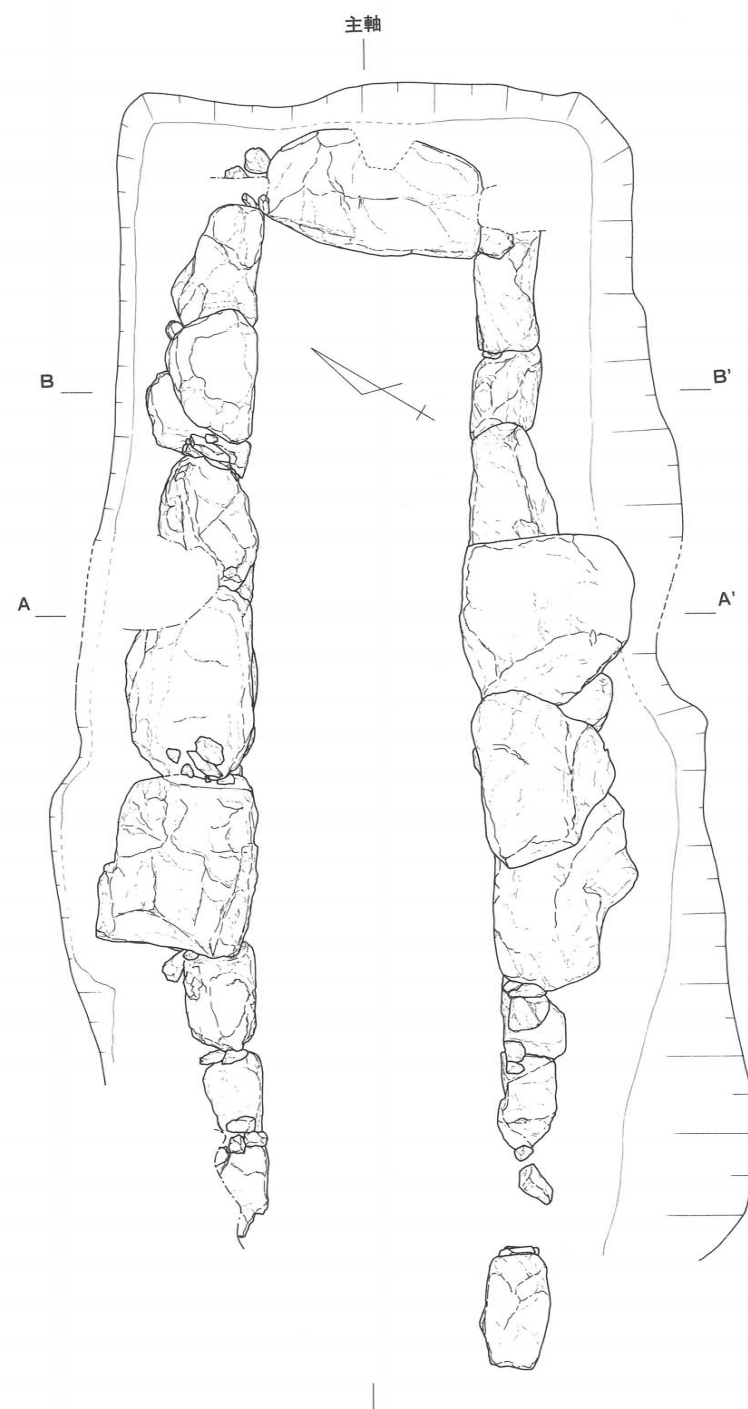
石室石材は、石室内に転落していたもの以外、天井石をはじめ上部のほとんどが取り除かれており、奥壁は1段目、側壁は1～2段目までが遺存しているのみである。

石組状況を見ると、石材は1石を除きすべて横位に使用されている。

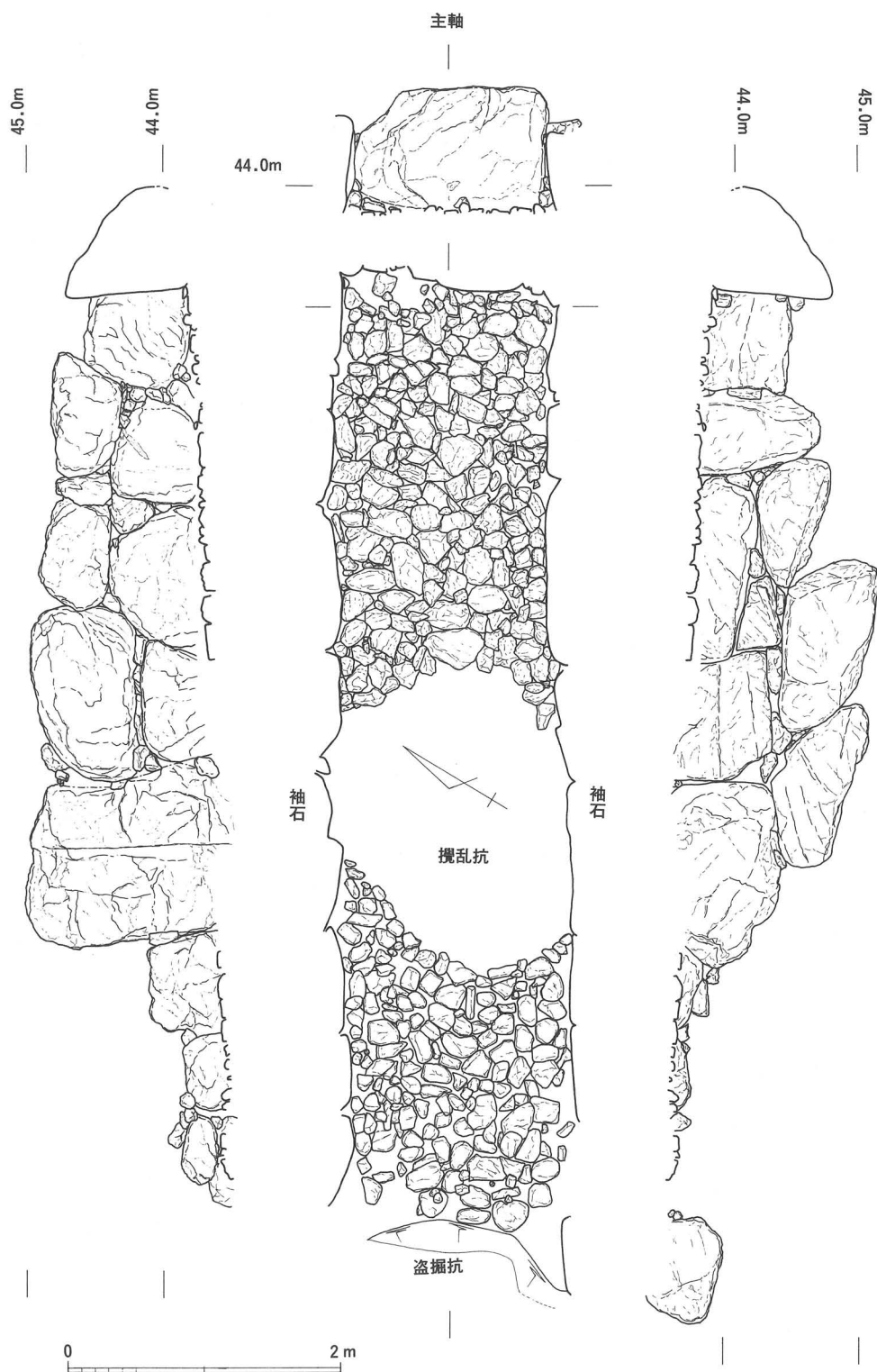
奥壁基底石はやや大型の石の一石積みである。

西側壁は基底石の上面、2段目の上面が揃えられている。これに対して東側壁は奥から2・3列目の基底石が乱れており、2列目の石は縦位に、3列目の2段目はやや小型の石材が使用されている。このことから石組みの順序は東側壁が西側壁より後と考えられる。

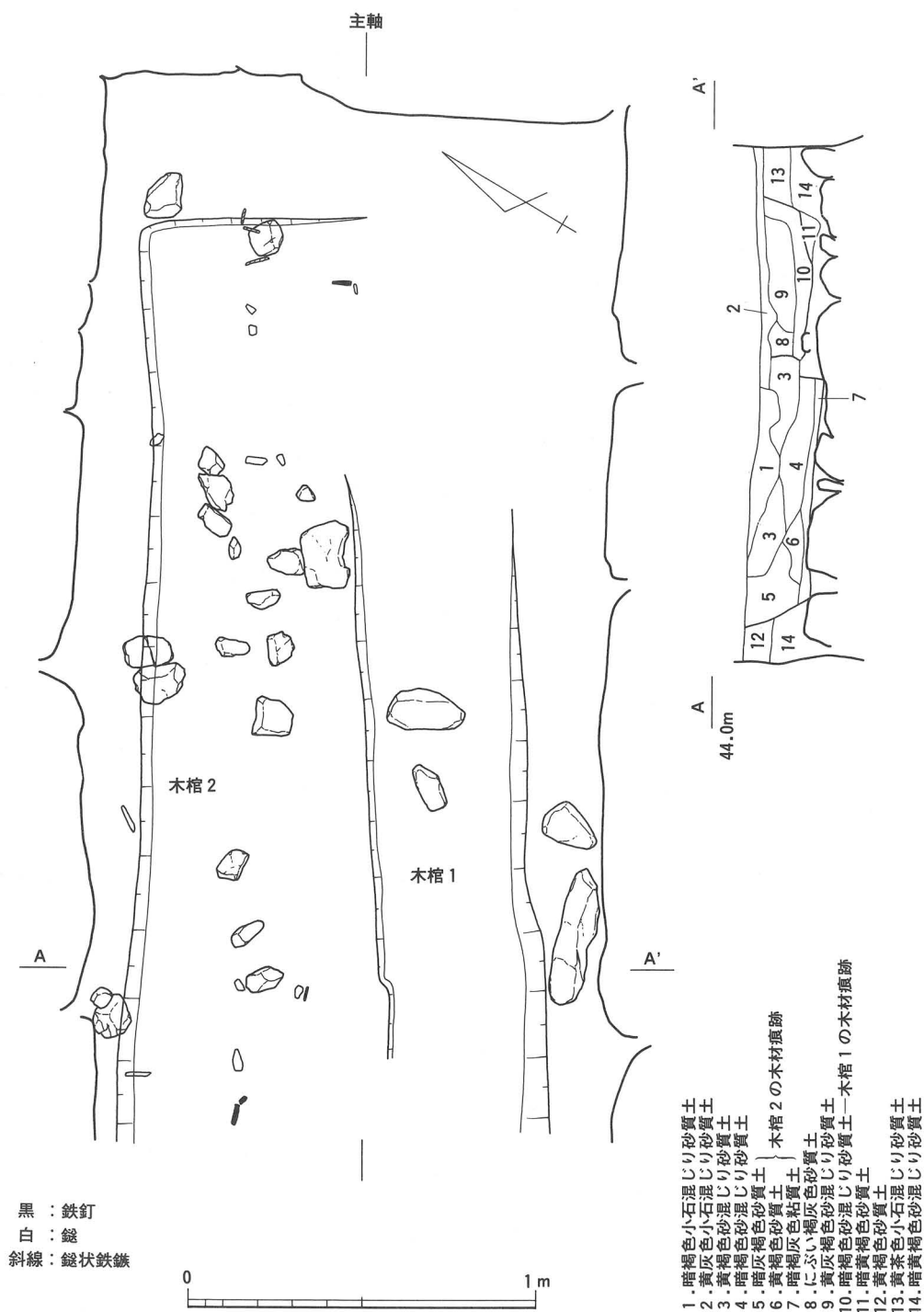
西側壁の奥から5列目に、高さ約1.2m・幅約1.2mを測る石室内最大の石材が使用されており、これに対応する東側壁の石もやや大型のものが使用されている。これらは袖石として意識されたものと考えられる。このことから基底部の石材は、玄室部4列・羨道部4列以上となる。西側壁では袖石の上面は玄室の2段目上面に揃えられ、東側壁では袖石の上面は基底石上面に揃えられている。



第4図 石室平・断面図(S=1/50)



第5図 石室展開図(S=1/50)



第 6 図 玄室内木棺平・断面図 (S = 1 / 20)

羨道部は遺存状況が悪く不明な点が多いが、玄室部に比して小型の石材が用いられているようである。

石材には自然石が用いられており、側壁の一部には面を揃えるために割って加工したと思われる石がみられるが、工具痕等は認められなかった。

明確な閉塞石はなかったが、羨道部南端付近には床面よりやや浮いた小型の石がみられ、これらがその名残りかもしれない。

なお石室石材はほとんどが角閃石閃緑岩で、他に細粒黒雲母花崗岩 1・アプライト質黒雲母花崗岩 2・片麻状アプライト質黒雲母花崗岩 1 がある。これらは当地楽音寺北東部の谷から南東部の大窪の谷まで、遠くみても 2 km の範囲から運ばれたと推定されている。^{註 3}

〈床面〉(第 5 図)

石室床面は石敷きで、径 10cm～40cm の石が石室内全面の地山上面に敷きつめられている。なお玄門付近は現代の攪乱坑掘削の際に取り除かれている。敷石の状況には規則性は無いが、玄室の中央部から南西部にかけて特に大きめの石が用いられ、その隙間には小さい石を充填している。

敷石上面のレベルは標高 43.82m～43.59m を測り、玄室奥から羨道端にゆくほど低くなっており、検出部分で約 23cm の比高差が認められる。敷石下の地山面も同様に、排水機能を考慮したものと考えられる。なお地山面には排水溝は施されていない。

〈木棺〉(第 6 図)

玄室内の床面で、主軸に平行する木棺の痕跡 2 か所を確認した(木棺 1・2)。検出面の標高は約 43.9m で、敷石上面から約 18cm 上である。木棺 1 は両側板部、木棺 2 は西側板部と北小口部を検出した。先後関係は平面・断面では捉えられなかった。木棺 2 の範囲から鏝・釘等の緊結具が出土している。

木棺 1 は玄室の東側に位置し、検出長約 190cm・幅約 46cm・深さ約 11cm を測る。第 10 層が側板と底板の痕跡と考えられる。

木棺 2 は玄室の西側に位置し、検出長約 267cm・幅約 65cm・深さ約 18cm を測る。第 5～7 層が側板と底板の痕跡と考えられる。規模をみると通常の木棺に比して長さがやや長くなり、これは北小口板の倒壊等のために平面的に正確な範囲が捉えられていないためと考えられる。

敷石上面には棺台となる可能性があるやや浮いた石が数か所にみられるが、明確にはできなかった。

なお羨道部からも緊結具が出土していることから、木棺が納められていた可能性が高いが、痕跡は認められなかった。

第5節 出土遺物

石室内床面からは副葬品の土器、鉄製品（武器・馬具）、装身具（耳環）のほか木棺の緊結具が出土した。また事前調査ではこれより上層の石室埋土からは近世陶磁器が出土している。

また羨道部側壁上部の表土からは銅銭「寛永通宝」が5枚出土している。

	土 器		鉄 製 品			装身具
	須 恵 器	土 師 器	武 器	馬 具	緊 結 具	耳 環
玄 室	装飾器台 1	高杯 4	直刀+鐔 2組	轡 1	鎧（手部）	A 銀環 2
	有蓋高杯 3組		鉄鍬 11	兵庫鎖 2	A 8	
	甕 1		刀子 3	鞍 2	C 2	
	提瓶 1		不明 2	鐙？ 断片	鉄釘	
	台付長頸壺の蓋 2			不明 2	A 2	
	口縁 1				B 2	
	杯身 1					
	器台脚部 ^{註4} 1					
羨 道	有蓋高杯 1組	長頸壺 2	鉄鍬 1		鎧（手部）	B 金環 2
	無蓋高杯 3	提瓶 1			B 3	C 不明 2
	杯蓋 3	甕 1				
	平瓶 2				鉄釘	
	提瓶 1				B 1	
	広口短頸壺 1				C 3	
	台付長頸壺の台部 1					

表1 出土遺物一覧表(事前調査出土遺物、及び図化しえなかった破片を含む)

〈土器〉(第10～12図)

1. 玄室

須恵器の装飾器台1点・有蓋高杯3組・台付長頸壺の蓋2点・同口縁部片1点・甕1点・提瓶1点・杯身1点・器台脚部1点、土師器の高杯4点があり、杯身以外は北東角から東側壁沿いにまとまった状態で出土している。

装飾器台(1)は、出土地点に転落していた東側壁の石材によって破壊されたようで(図版5)、破片が周辺に飛散したような状況であった。口縁部に小像群と小壺を付ける配像高杯形器台に分類されるもので、高さ約57cmを測り、口縁端部には鳥6個・甕形壺3個・短頸壺3個が付されている(復元)^{註5}。配列は、6個の鳥の間に甕形壺と短頸壺を交互に配している。鳥は5個が遺存しており、量量は高さ4.0cm～5.5cm・長さ4.2cm～8.0cm・幅1.5cm～2.0cmを測る。口縁に沿って横向きで、正面からみると1個を除いて頭部が左向きである。いずれも雑な手づくね成型で、形はいびつなものである。目は竹管文状の点、口は切れ目を入れることにより表現されているが、羽根の表現は施されていない。一応、かなり形骸化された鳥としたがやや疑

問があり、他の動物（馬等）である可能性もある。甕形壺は口径8 cm・器高約9 cmを測り甕本来のような体部の穿孔は施していない。短頸壺は口径約5 cm・器高約5 cmを測る。いずれも体部以上は回転ナデ調整で、甕形壺の頸部には回転カキ目があり、底部の接合部はナデ調整による。脚底部の平面形は正円形ではなく、やや方形を呈している。脚部の造形は、当高安古墳群愛宕塚古墳出土の器台に非常に類似している（当器台がスカシの段数が1段少ない）。

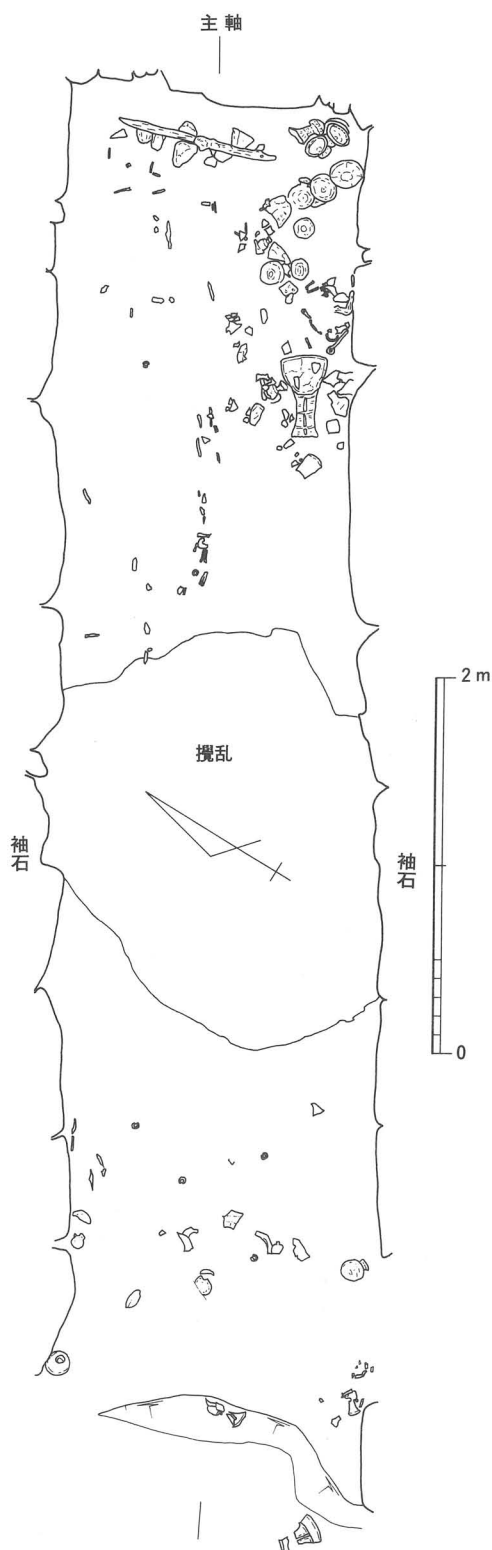
有蓋高杯（2～7）はいずれも高杯脚部に1個の円孔を施す同一形態のもので、胎土・焼成も類似している。

台付長頸壺の蓋（10・11）はつまみ部に特徴があり10は極端に扁平で、11は棒状を呈する。

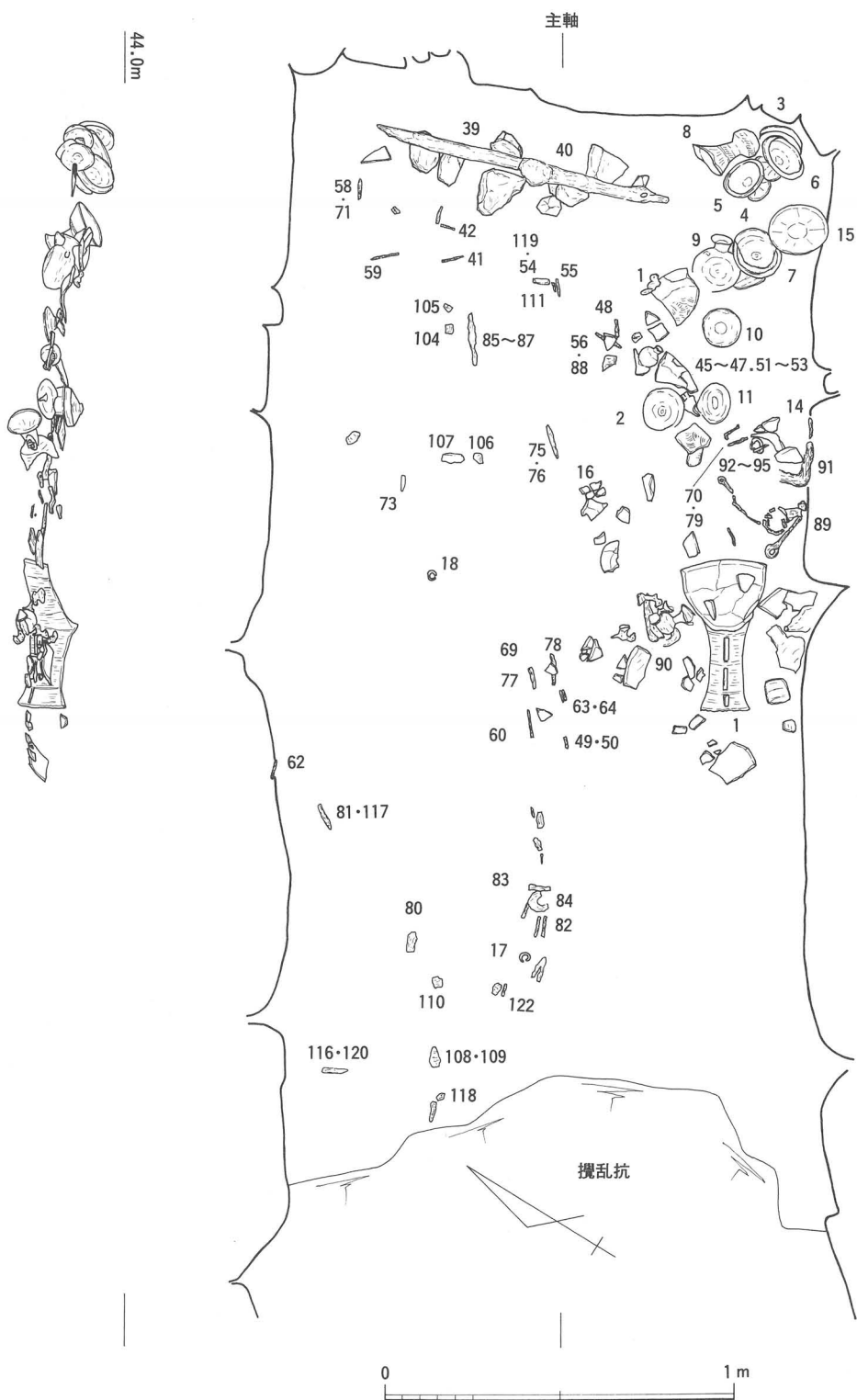
杯身（13）は攪乱坑の北西部肩際出土で、小破片でもあり混入の可能性はある。

土師器高杯（14～16）には杯部が碗状のもの（14）と皿状のもの（15）がみられ、他にも図化しえなかったが14に類似する口縁部が1点出土している。

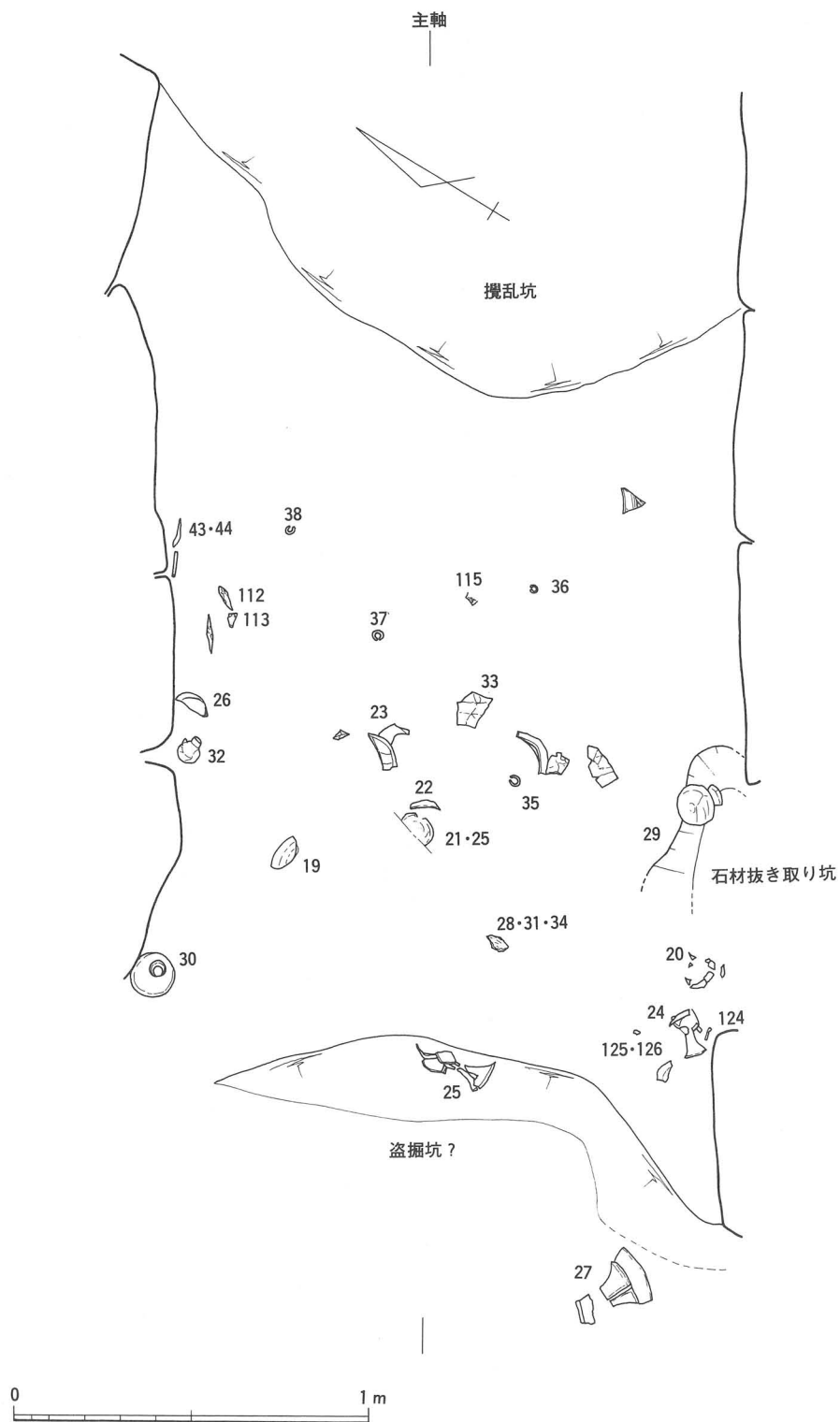
これらの土器は、須恵器では陶邑編年のⅡ型式4段階頃に比定され、時期は6世紀後半にあたる。杯身（13）のみがやや古相を呈しⅡ型式2～3段階－6世紀中頃にさかのぼる。



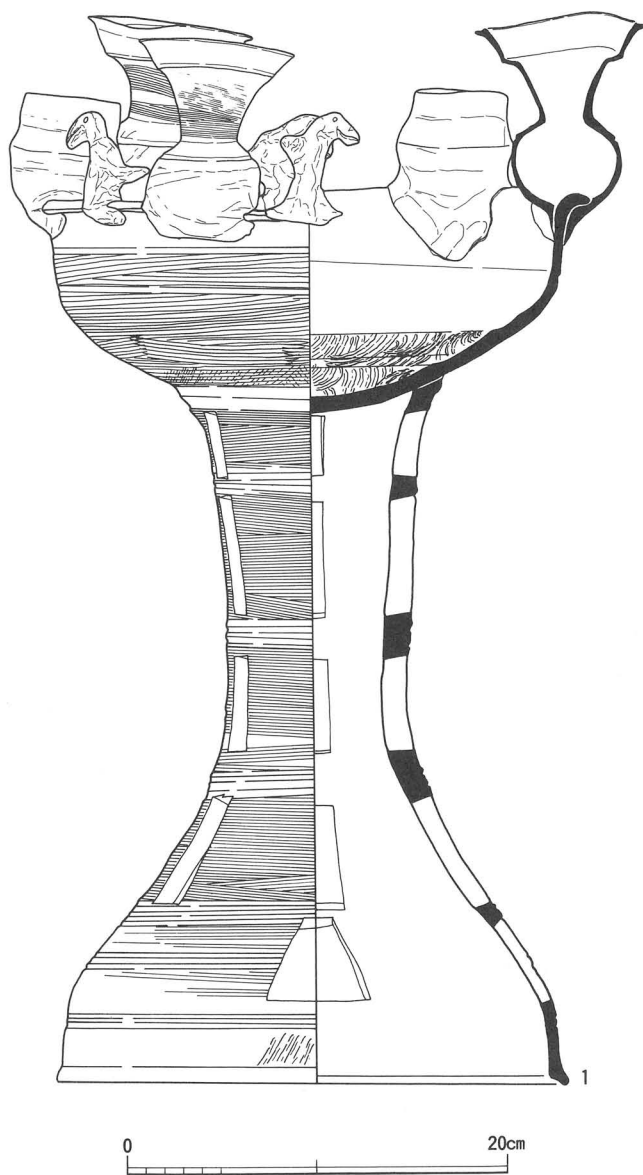
第7図 石室遺物出土状況平面図
(S = 1 / 40)



第 8 図 玄室遺物出土状況平面・見通し図 (S = 1 / 20)



第9図 羨道遺物出土状況図(S=1/20)

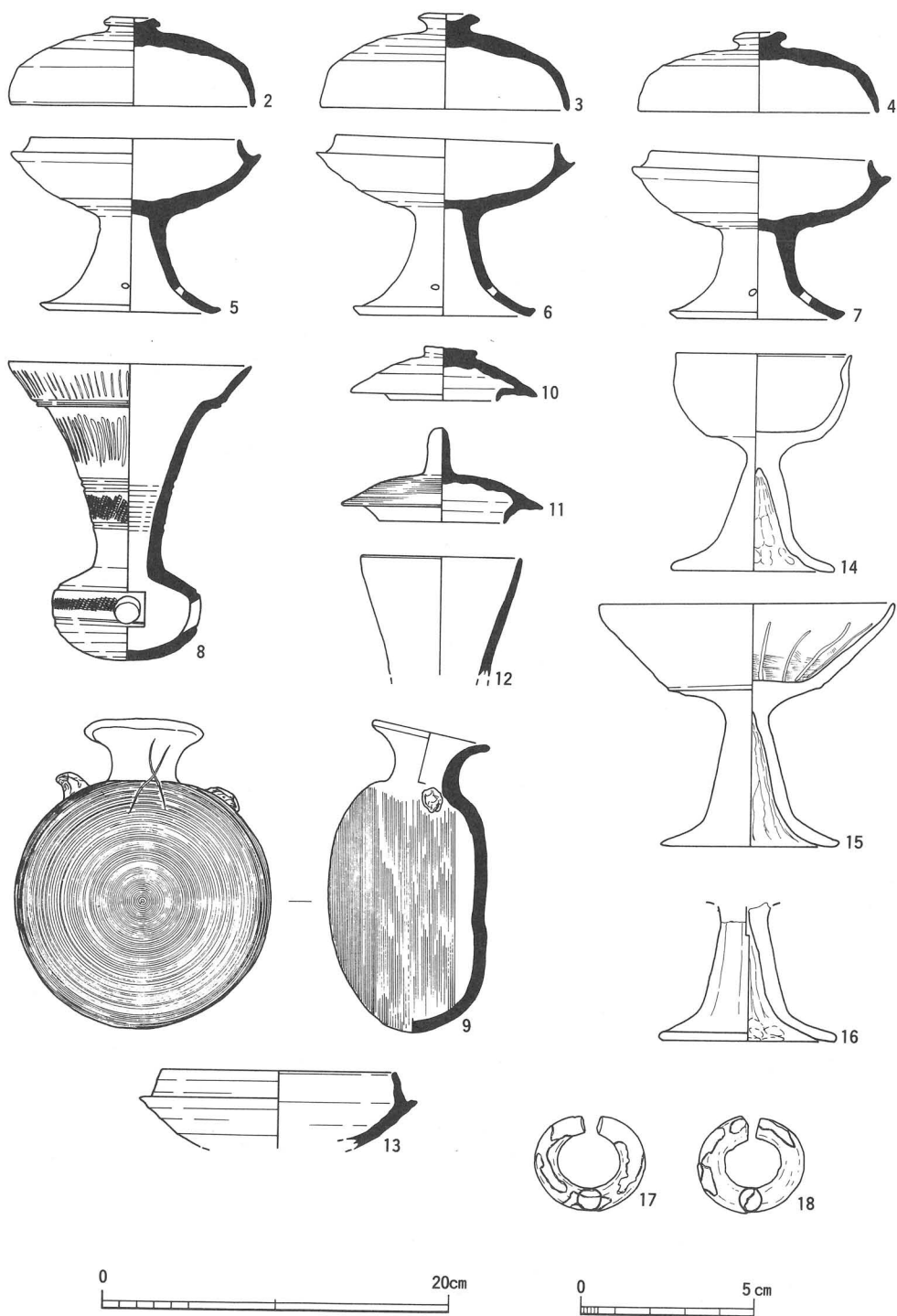


第10図 玄室出土遺物実測図①(S = 1 / 4)

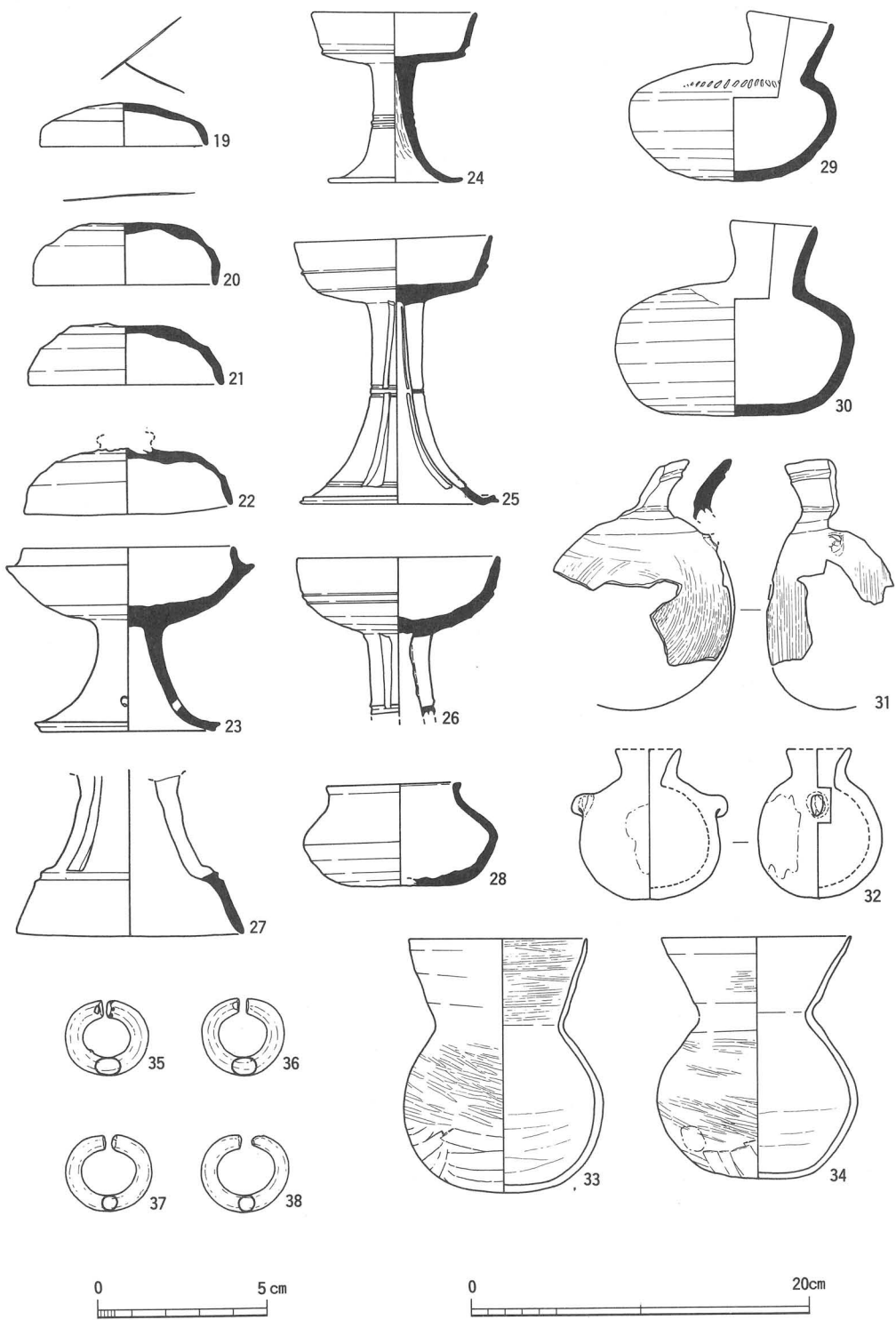
2. 羨道

須恵器の有蓋高杯1セット・無蓋高杯3点・杯蓋3点・平瓶2点・提瓶1点・広口短頸壺1点・台付長頸壺の台部1点、土師器の壺2点・提瓶1点・甕1点が出土した。

須恵器平瓶(29・30)および土師器提瓶(32)は、両側壁際に据えられていると考えられる



第11図 玄室出土遺物実測図②(S=1/4・1/2)



第12図 羨道出土遺物実測図(S=1/4・1/2)

(30・32は西基底石際。31は東基底石抜き取り坑に転落した状況であった。)が、その他はかなり攪乱されており破片が多く、敷石からかなり浮いた状態のものもある。

無蓋高杯(25)の脚部、台付長頸壺の台部(27)は南端の盗掘坑から出土した。27は玄室出土の口縁部(12)と同一個体の可能性がある。焼成は27の方が不良であるが胎土は類似している。またこの盗掘坑からは玄室出土の装飾付器台(1)の破片も出土している。32は器高9.0cmを測り、ミニチュア製品と考えられる。成形は通常の須恵器提瓶とは異なり、杯状の二個体を合せ口にして貼り合わせたのち口縁部を挿入している。

有蓋高杯(22・23)は玄室出土のものと同一形態で、胎土や焼成も類似している。

広口短頸壺(28)・提瓶(31)・土師器壺(34)は破片となって南部でまとまって出土している。

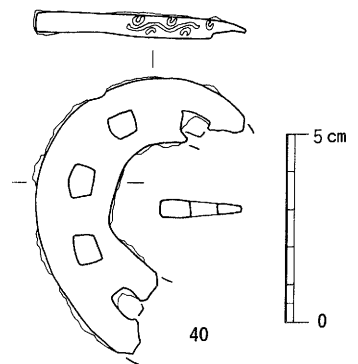
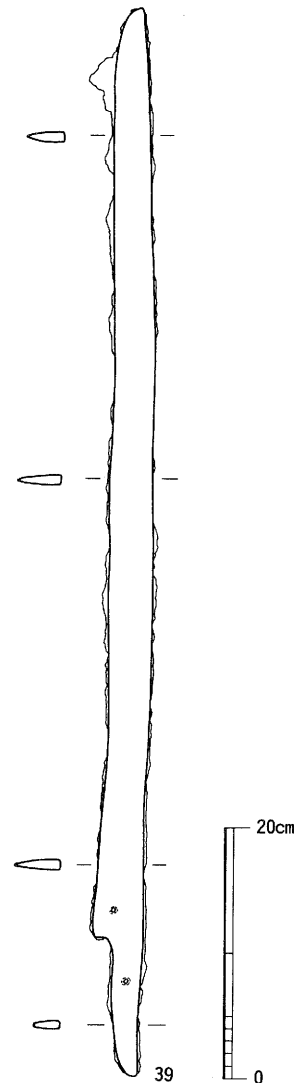
なお土師器甕は図化しえなかった。

これらの土器の時期は、玄室出土土器と同様6世紀後半に比定される。杯蓋とした19がやや新しく、Ⅱ型式6段階-7世紀代に下るものと考えられるが、壺等の蓋である可能性もあり、断定は避けたい。

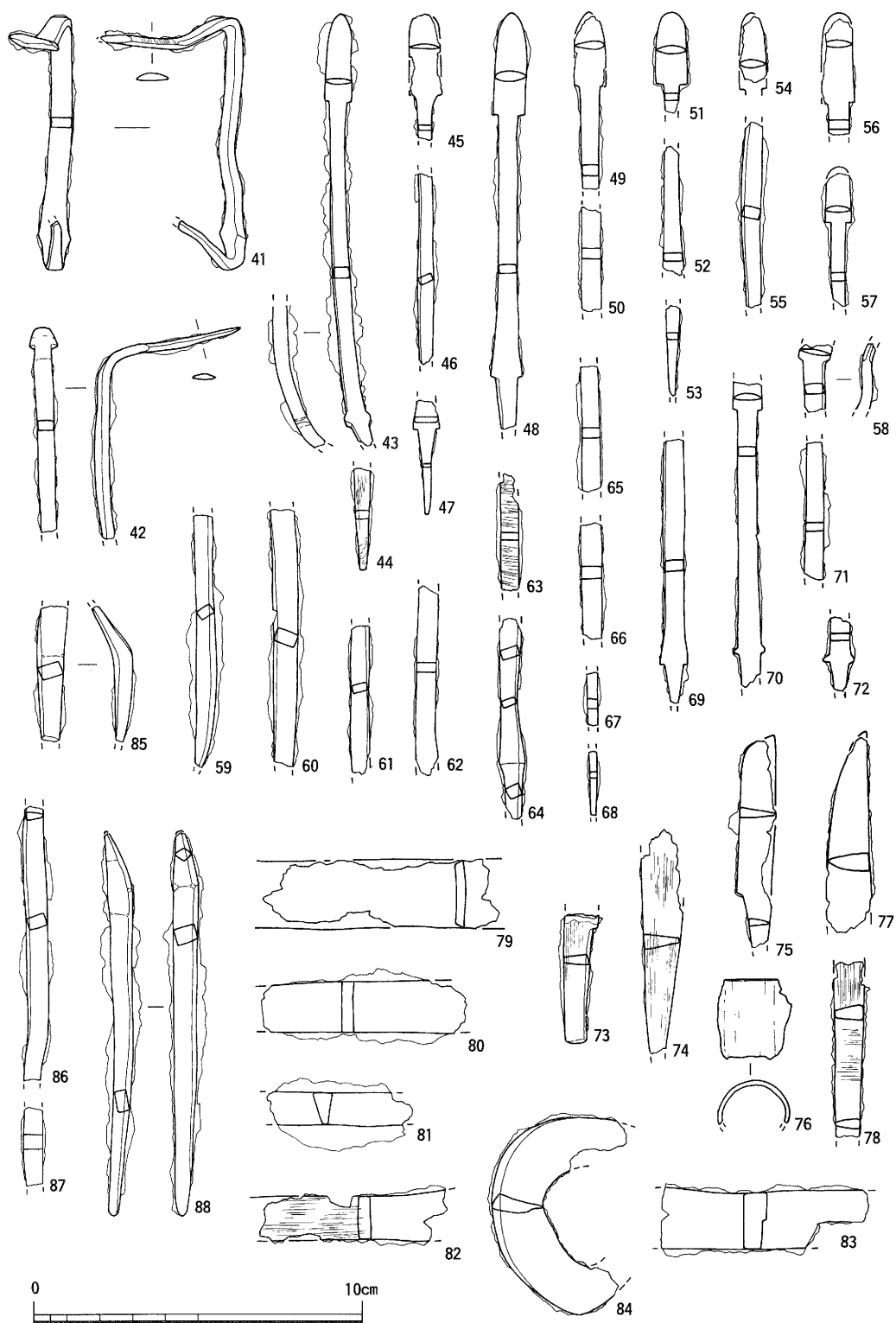
〈武器〉(第13・14図)

直刀A(39・40)

全長約85cm・刃部長約74cmを測る鉄刀である。全体の形状はやや内反り気味である。茎尻から約7.6cmの位置に1箇所、約13.0cmの関部に1箇所の円形目釘穴を有する。出土状況は、玄室奥壁に沿ってほぼ平行に、切先を西に、刃を南に向け、石を台にして敷石面から浮かせて置かれていた。この石については北西部奥壁際の敷石と考えられ、この部分の敷石は抜き取られている。セットとなる鐔(40)は長辺7.3cm以上・短辺5.4cm以上を測り、刀に銹着していた。方形の透穴(おそらく8個)を有するもので、外縁には銀象嵌による波



第13図 鉄刀実測図
(S=1/6・1/2)



第14図 武器類実測図(S=1/2)

状文・勾玉形文が施されている。6世紀後半に位置付けられる福島県いわき市八幡の八幡横穴4号墳出土の鐔に形状・法量・文様ともに類似している。^{註7}

直刀B (79～84)

玄室南部のほぼ中央で切先を北に向け、主軸に平行して検出された。遺存状況が悪いため全容は不明であるが、82～84は直線的に並ぶ出土状況であり、直刀鐔部分の同一個体として問題はなかろう。79～81は出土地点はやや離れるものの、82・83との類似性から同一個体とした。全長約50cm以上を測ると考えられる鉄刀で、直刀Aとセットになる短刀となる可能性がある。82は茎部と考えられ、表面には木質が遺存している。鐔(84)は長辺6.0cm以上・短辺4.1cm以上を測る。X線写真により、外縁には銀象嵌が施されていることが確認されたが、遺存状態が悪く文様は不明である。(図版24)

鉄鏃 (41～72)

鏃身の数からみると玄室部で11本以上、羨道部で1本が確認された。玄室部では主に北半部に散乱している状況である。完形品になるものはないが、すべて長頸鏃に含まれるものである。全長はいずれも約15cm程度と考えられる。鏃身は断面レンズ状の両刃のもので、鏃身長2.2cm～3.2cm・同幅約1.0cmを測る。頸部断面は6mm×3mm程度の長方形を呈する。関部の形態には二種類が認められ、台形関(41・48他)、棘状関(43・70他)がある。かなり変形したものがみられ、このうち41・42は、その形状から鏃として使用されていた可能性がある。

刀子 (73～78)

玄室部中央付近に散乱した出土状況で、破片のみの出土であるが刃部2本・茎部3本が確認できた。茎部にはいずれも木質が遺存している。75には柄金具(76)が付属している。

不明鉄製品 (85～88)

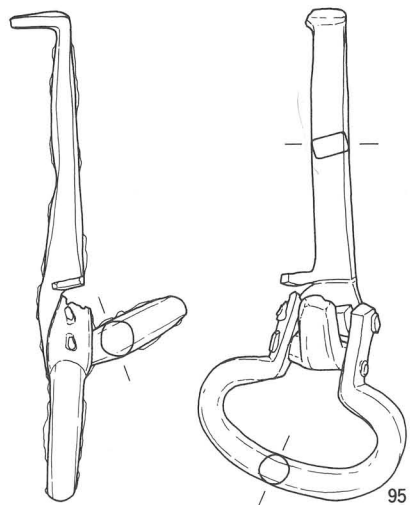
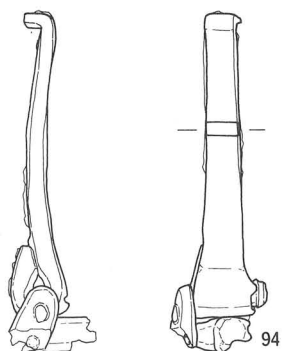
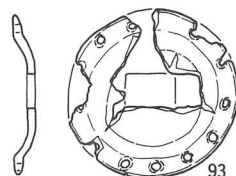
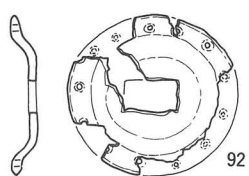
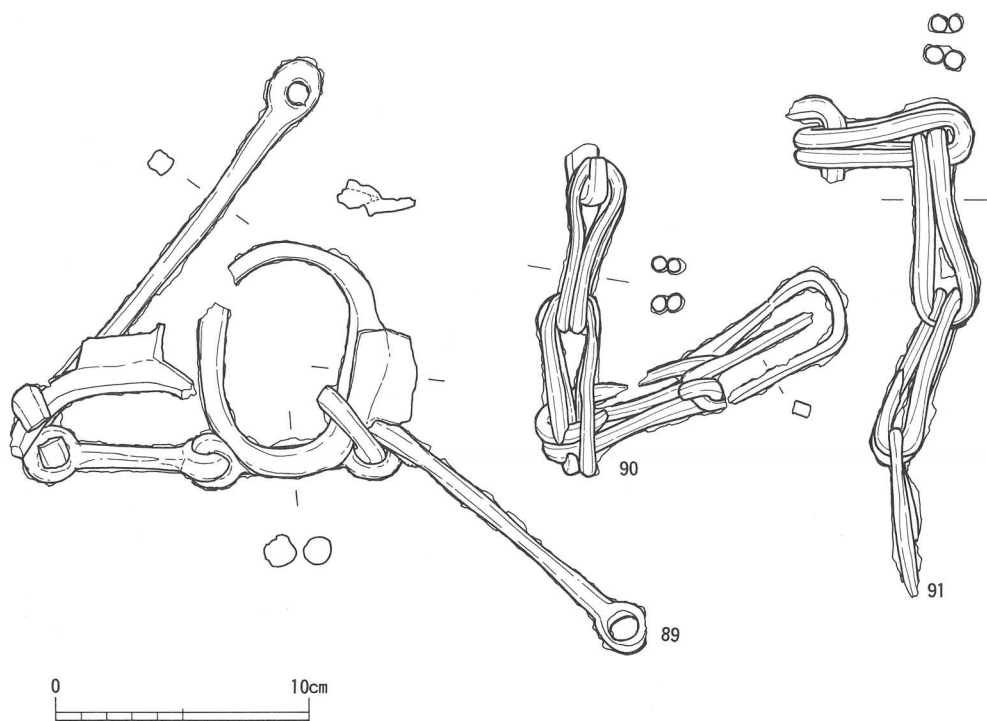
85は先端が屈曲したのち扁平になっている。88は先端部が尖り、断面三角形に近い。形態的にいずれも鉈である可能性がある。

〈馬具〉(第15～17図)

玄室土器群の南部、東側壁際でまとまって検出された。

轡 (89)

鏡板・銜・引手で構成される鉄製環状鏡板付轡で、折り重なった状態で銹着して一体となっている。鏡板は直径約1.0cmの断面円形の鉄棒による楕円形の環状鏡板で、長辺約9.3cm・短辺約6.7cmを測る。立間は幅約3.3cmを測るが、上部は欠損しており、形状や構造は不明である。銜は両端が輪状を呈する直径約1.0cmの断面円形の鉄棒による2連式のもので、全長は約15.0cm・一連の長さ約8.0cm・連結部の輪径約2.2cmを測る。引手は両端が輪状を呈する直径約0.8



第15図 馬具実測図(S=1/3・1/2)

cmの断面円形（方形の可能性あり）の鉄棒によるもので、長さ約19.0cm・両端の輪径約2.0cmを測る。各部品は、断面約0.8cm×0.4cmの長方形を呈する扁平な鉄棒からなる径3cm～4cmの輪金により連結され、いわゆる遊環式に属するものである。

兵庫鎖（90・91）

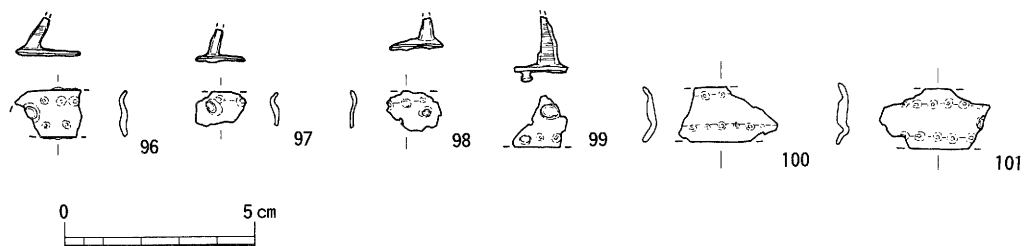
90は東側壁際で、91は他の馬具からやや離れた位置で検出された。両者とも直径約0.7cmの断面円形の鉄棒による兵庫鎖で、3連からなる。一連の長さは7cm～8cmを測る。鎖の一端には鉸具が、もう一端には鐙に接続するためと考えられる環状金具が付属している。鉸具の輪金は断面約0.6cm角の方形の鉄棒からなり、平面形は長さ約7.3cm・上辺約3.5cm・下辺約4.3cmの台形を呈し、上辺部に刺金を有している。この上辺部に兵庫鎖が接続し、刺金は兵庫鎖に挟まれる位置に巻きつけられている。刺金は断面約0.6cm角の方形の鉄棒からなる。環状金具は断面約0.8cm×0.4cmの長方形を呈する扁平な鉄棒からなる。

鞍（92～95）

同一形態のもの2個体があり、輪金・刺金・留金具・座金で構成されている。遺存状態の良好な95をみると、輪金は直径約0.7cmの断面円形の鉄棒を凸形に曲げたもので、両端の刺金・留金具との連結部は扁平になっている。刺金はT字形を呈するようで、長さ約4cm・径約0.9cmを測り、頭部両端は輪金両端部の穴に挿入されている。留金具は断面0.9cm×0.6cmの長方形の鉄棒で、全長は94が約8.1cm、95が約9.6cmを測る。一端は扁平にして輪金両端部を連結する芯棒に巻きつけられ、もう一端は鞍に固定するためにL字状に曲げられている。屈曲部と芯棒巻きつけ部間の寸法から、鞍の厚さは5～6cmと推定できる。座金は直径4.3cm～4.6cmの平面円形の鍔付帽子形で、高さは92が約0.8cm、93が約0.6cmを測る。中央部に留金具を通すための1.3cm×0.8cmの長方形の穴を有する。鍔状部には13個の鉾が打たれている。

鐙（96～101）

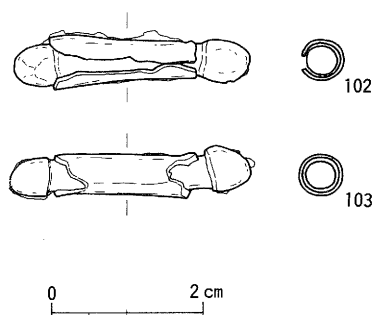
これらは木芯鉄張輪鐙の断片と考えられるが断定はできない。幅1.3cm～1.6cmの帯状を呈し、両側はやや内側に湾曲し、湾曲部分には約0.4cm間隔でくぼみが並んでいる。中央部には長さ約1.4cmの鉾が打たれている。



第16図 鐙実測図(S = 1 / 2)

不明鉄製品 (102・103)

長さ約3.1cmを測り、両端が丸く肥厚した円棒に鉄板を巻きつけた形状を呈する。円棒は径約0.4cm・端部径約0.6cmを測る。鞍(95)の輪金両端部を連結する芯棒に類似しており、同様の用途が考えられる。



第17図 不明鉄製品実測図
(S = 1 / 1)

〈緊結具〉(第18図)

玄室内では主に西半部に分布しており、これは木棺2の範囲と合致するといえる。しかしこれらの緊結具の位置から木棺の規模・構造を復元するまでには至らなかった。

鍔は鉄棒をコの字形に曲げたもので、鉄釘はすべて角釘である。完形品になるものは無かったが、鍔・鉄釘ともに法量・形状等からA～Cの三種類に分類した。なおこの他に前述のとおり、鉄鍔を曲げて鍔として使用した可能性のあるものが2点出土している(41・42)。

鍔A (104～111)

背部の断面約1.5cm×0.3cmの長方形を呈するものである。ほとんどが手部から屈曲部の破片であり、背部が完存しているものは無く全容は不明である。手部は長さ約6.5cmを測り、二等辺三角形を呈する。背部は長さ5.4cm以上を測る。手部には両面に横位の木質が遺存する。手部が8個出土していることから4個体以上となり、出土状況から104と105、106と107、108と109が同一個体であると考えられる。

鍔B (112～115)

鍔Aよりやや細身で、断面0.8cm～1.5cm×0.3cmの長方形を呈するものである。羨道部から出土している。出土状況から112と113が対になると考えられる。

鍔C (116・117)

鍔A・Bとは異なり断面形状が正方形に近い。鍔として分類したが、鉄釘の折れ曲がったものか、あるいは意図的に曲げたものかもしれない。

鉄釘A (118～120)

断面が一辺0.8cm～1.0cmの方形を呈する角釘である。118は残存長16.2cmを測り、上半部と下半部に互いに直交する横方向の木目が遺存している。頭部形状は不明である。

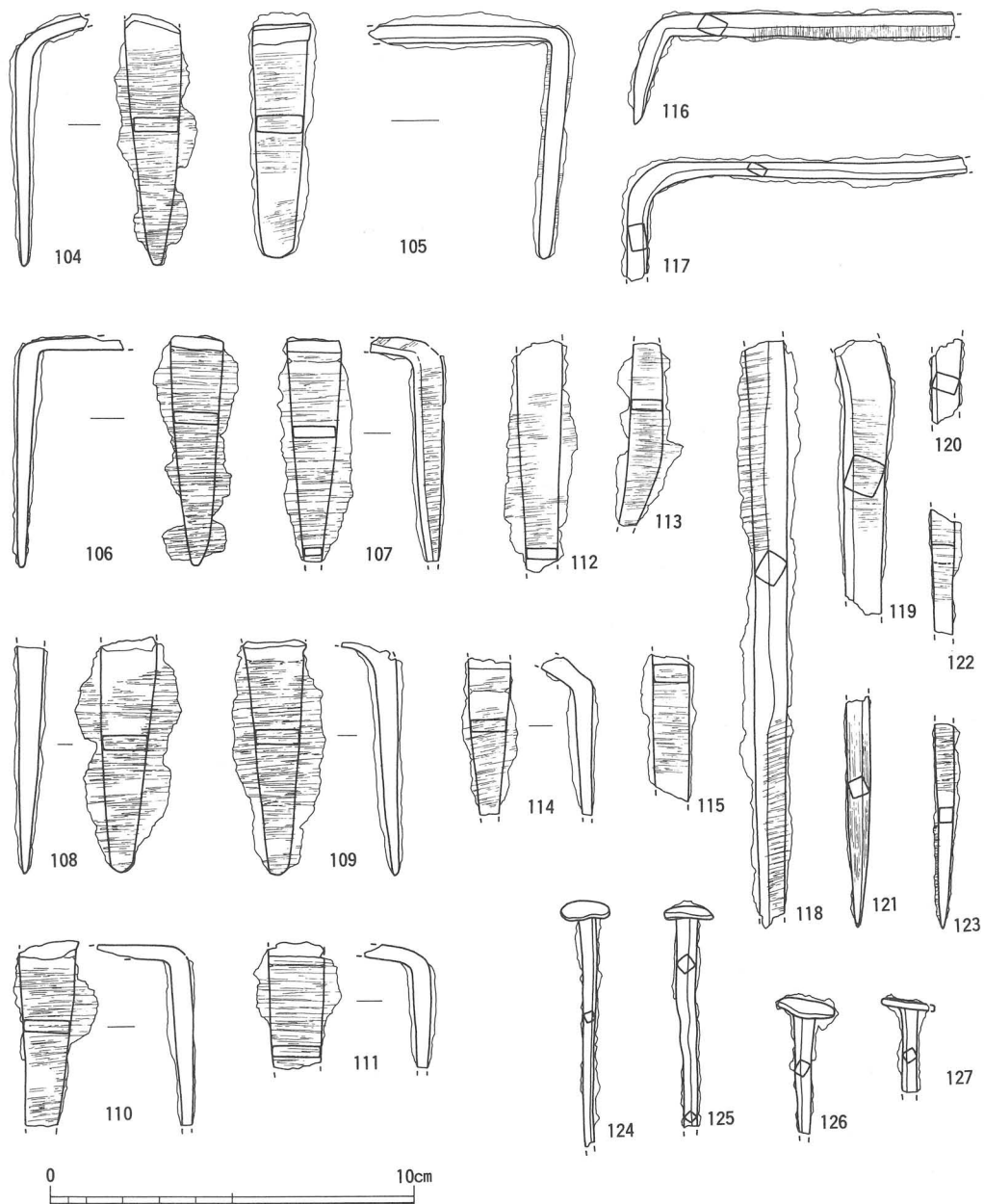
鉄釘B (121～123)

鉄釘Aより細身で、断面が一辺0.4cm～0.6cmの方形を呈する。頭部形状等は不明である。121には縦方向、122には横方向、123には上半部と下半部に互いに直交する横方向の木目が遺存し

ている。

鉄釘C (124~127)

羨道部南東でまとまって出土した。直径1.3cm~1.6cmの円形の扁平な鉄頭を有するもので、断面は一辺0.3cm~0.4cmの方形で、鉄釘Bに比して細身である。



第18図 緊結具実測図(S = 1 / 2)

〈装身具〉（第11・12図）

耳環（17・18、35～38）

玄室部から1組－A（17・18）、羨道部から2組－B（35・36）、C（37・38）が出土している。出土位置からいずれも元位置は保っていないと考えられ、出土状況でも35は敷石の隙間に落ち込んで、36・37は敷石から浮いた状態で出土している。

Aは銅芯銀張りで、銀張りは部分的に遺存している。直径2.8cm～3.2cm・断面径0.7cmを測る。Bは銅芯金張りで、遺存状況は良好である。直径2.2cm～2.5cm・断面径0.5cm×0.7cmで、断面形は楕円形を呈する。Cは直径2.3cm～2.6cm・断面径0.4cm～0.5cmを測る細いタイプのもので、銅芯のみが残っている。

図版 19		外径(mm)		内径(mm)		断面形状(mm)	開き部 間 隔 (mm)	重さ (g)	備 考
		長辺	短辺	長辺	短辺				
A	17	32.0	27.5	18.0	16.0	7.5×7.0の円形	3.5	14.15	銅芯銀張り
	18	31.0	28.0	16.0	14.5	7.0×7.0の円形	2.0	13.90	銅芯銀張り
B	35	24.5	22.5	13.5	12.0	7.5×5.5の楕円形	1.0	12.20	銅芯金張り、遺存良好
	36	25.0	23.5	14.5	13.0	7.5×5.5の楕円形	2.0	13.00	銅芯金張り、遺存良好
C	37	25.5	23.0	16.0	13.5	4.5×5.0の円形	1.5	6.40	銅芯のみ
	38	26.5	23.0	17.0	14.0	5.0×5.0の円形	2.5	5.95	銅芯のみ

表2 耳環観察表

第4章 出土遺物観察表

土器

遺物番号 図版番号	器 種	法量 (cm)		(復元値)	色 調	外 内	胎 土	焼 成	技法・形態等の特徴	残 存 備 考
		口 径	器 高							
1	須恵器			器台高 47.7 脚底径 27.2	灰青色			良好	回転ナデ。杯部外面回転カキ目で、平行タタキ残る。杯底部内面同心円タタキ。脚部外面回転カキ目。杯部内面底部に別個体との剝離痕あり。下位ほど焼成不良。	ほぼ完形
14 15	裝飾器台	27.1	57.2							
2	須恵器			つまみ径 3.3 つまみ高 0.8	灰青色		粗	良好	回転ナデ。天井部外面回転ヘラケズリ。内面タタキの痕跡。	完形
16	杯蓋	14.3	5.2							
3	須恵器			つまみ径 3.5 つまみ高 0.8	乳灰青色		密	良好	回転ナデ。天井部外面回転ヘラケズリ。つまみ部ナデ。	完形
16	杯蓋	14.2	5.55		淡灰青色					
4	須恵器			つまみ径 3.2 つまみ高 0.7	乳灰青色		やや粗	良好	回転ナデ。天井部外面回転ヘラケズリ。つまみ部ナデ。	完形
16	杯蓋	13.8	4.7							
5	須恵器			受部径 14.4 底径 9.2	乳灰青色		密	良好	回転ナデ。体部外面回転ヘラケズリ。裾部1箇所円孔。	完形
16	高杯	11.9	10.15							
6	須恵器			受部径 14.9 底径 9.8	淡灰褐色		やや粗	良好	回転ナデ。体部外面回転ヘラケズリ。裾部1箇所に円孔。	完形
16	高杯	13.0	10.4							
7	須恵器			受部径 15.0 底径 10.2	青灰色		やや粗	良好	回転ナデ。体部外面回転ヘラケズリ。裾部1箇所に円孔。	完形
16	高杯	12.7	9.9							
8	須恵器			頸部高 11.8	灰青色		やや粗	良好	回転ナデ。底部外面回転ヘラケズリ。口頸部外面上位ヘラ描文。頸部外面中位、体部外面櫛描刺突文。外面自然釉。	口縁部1／4欠損
16	甗	14.0	17.4							
9	須恵器			体部径 15.0 体部幅 9.3	灰青色		密	良好	回転ナデ。表面回転カキ目。裏面周囲回転ヘラケズリ、中央ナデ。表面の頸部～体部ヘラ記号。	口縁部一部欠損
17	提瓶	7.0	18.1							
10	須恵器			天井径 10.7 つまみ径 3.0 つまみ高 0.4	淡灰青色 淡灰色		密	良好	回転ナデ。天井部外面回転ヘラケズリ。つまみ部ナデ。	完形
16	長頸壺蓋	6.2	3.15							
11	須恵器			天井径 11.5 つまみ径 1.4 つまみ高 2.7	灰褐色		やや粗	良好	回転ナデ。天井部外面回転カキ目。つまみ部ナデ。	完形
16	長頸壺蓋	7.2	5.5							
12	須恵器	(9.2)			暗青灰色		やや粗	良好	回転ナデ。	口縁部1／3反転
16	長頸壺									
13	須恵器	(13.4)		受部径 (16.0)	淡灰青色		やや粗	やや不良	回転ナデ。底部外面回転ヘラケズリ。	1／8反転
16	杯身									
14	土師器	(14.0)	12.5	底径 9.4	橙色		密	良好	杯部外面ナデ、内面ヨコナデ。脚部外面ナデ、内面しほり目。裾部内面ユビオサエ。	口縁部一部欠損
18	高杯									
15	土師器	17.05	14.15	底径 10.4	淡橙色		密	良好	杯部外面ヨコナデ、内面ヘラミガキでハケ残る。脚部ナデで、内面しほり目。	4／5
18	高杯									
16	土師器			底径 10.4	黄橙色		密	良好	脚部外面ナデ、内面しほり目。裾部外面ヨコナデ、内面ユビオサエ。	脚部4／5一部反転
18	高杯									
19	須恵器	10.0	2.6		青灰色		やや粗	良好	回転ナデ。天井部外面回転ヘラケズリ、内面ナデ。天井部外面ヘラ記号。	完形
16	杯蓋									
20	須恵器	10.8	3.8		乳白色		やや粗	やや不良	回転ナデ。天井部外面未調整。天井部外面ヘラ記号。	口縁部1／2欠損
16	杯蓋									

遺物番号 図版番号	器 種	法量 (cm) (復元値)			色 調 外 内	胎土	焼成	技法・形態等の特徴	残 存 備 考
		口径	器高						
21 16	須恵器 杯蓋	11.4	3.7		灰青色	密	良好	回転ナデ。天井部外面未調整、内面ナデ。	完形
22	須恵器 杯蓋	12.5			灰青色	やや粗	良好	回転ナデ。天井部外面回転ヘラケズリ。	つまみ欠損
23 16	須恵器 高杯	12.8	11.0	受部径 14.8 底径 11.0	灰青色	密	良好	回転ナデ。体部外面回転ヘラケズリ。裾部1箇所に円孔。	裾部一部欠損
24 17	須恵器 高杯	10.0	10.2	底径 8.0	青灰色	密	良好	回転ナデ。体部外面ヘラケズリ。脚部内面しほり目。自然釉。	口縁部・裾部一部欠損
25 17	須恵器 高杯	11.9	11.1	底径 11.9	灰青色	密	良好	回転ナデ。杯部内面中央ナデ。脚部内面自然釉。二段三方向スカシ。	口縁部1／3欠損
26 17	須恵器 高杯	10.2			灰白色	やや粗	良好	回転ナデ。体部外面回転ヘラケズリ。三方向スカシ。自然釉。	杯部完存
27 17	須恵器 台付長頸壺			底径 (13.4)	淡灰褐色	やや粗	やや不良	回転ナデ。三方向スカシ。	脚部1／2のみ
28 18	須恵器 広口短頸壺	8.0	6.3	体部径 11.5	灰白色	やや粗	やや不良	回転ナデ。底体部外面回転ヘラケズリ。	2／3
29 17	須恵器 平瓶	5.3	10.1	体部高 7.0 体部径 12.4	灰青色	密	良好	回転ナデ。底体部外面回転ヘラケズリ。	完形
30 17	須恵器 平瓶	5.4	11.7	体部高 8.0 体部径 14.3	灰白色	やや粗	良好	回転ナデ。体部外面回転ヘラケズリ後ナデ。底部外面煤付着。	完形
31 18	須恵器 提瓶				灰褐色	やや粗	やや不良	回転ナデ。体部外面回転カキ目。	1／4
32 18	土師器 提瓶	3.8	8.8	体部径 8.3 体部幅 7.3	橙色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。体部外面黒斑。体部成型は杯状の二個体を合わせる。	ほぼ完形
33 18	土師器 壺	11.0	15.2	体部径 12.3	暗橙色	密	良好	口縁部外面～端部ヨコナデ。口縁部内面ハケ。底体部外面上位ヘラミガキ、下位ヘラケズリ、内面ナデ。	4／5
34 18	土師器 壺	11.3	14.5	体部径 11.9	暗橙色	密	良好	口縁部ヨコナデで、外面ハケ残る。底体部外面上位ヘラミガキ、下位ヘラケズリ、内面ナデ。底部外面黒斑。	4／5

鉄製品

遺物 番号	図版 番号	器種	法 量 (cm)											() は残存値		
39	19・24	直刀	全長	85.0	刃長	73.9	刃幅	3.5	刃厚	0.8	茎長	11.1	茎幅	2.3	茎厚	0.7
40	19・24	鐔	長辺	7.4	短辺	5.4	厚さ	0.5								
		鉄鏃	全長	鏃身長	鏃身幅	鏃身厚	頸部長	頸部幅	頸部厚	茎部長	茎部幅	茎部厚				
41	20			2.3	1.0	0.25		0.7	0.35		0.4	0.2				
42	20			2.9	0.8	0.2		0.5	0.3							
43	20		(13.2)	2.7	0.8	0.2	9.6	0.5	0.35	(0.9)						
44										(3.0)	0.4	0.3				
45			(3.9)	2.5	0.95	0.15	(1.4)	0.45	0.2							
46							(5.9)	0.45	0.25							
47			(3.5)				(0.9)	0.7	0.2	2.5	0.3	0.2				
48	20		(12.8)	3.2	1.0	0.35	8.1	0.55	0.3	(1.6)	0.5	0.3				
49	20		(5.45)	2.3	0.95	0.25	(3.1)	0.5	0.35							
50							(3.3)	0.6	0.35							
51			(3.1)	2.25	1.0	0.3	(0.85)	0.45	0.2							
52							(4.1)	0.6	0.25							
53										(2.9)	0.4	0.25				
54				(2.1)	0.8	0.3										
55							(5.75)	0.6	0.35							
56			(3.8)	2.8	0.9	0.3	(1.0)	0.65	0.3							
57			(4.1)	(1.5)	0.8	0.2	(2.6)	0.4	0.25							
58			(2.1)	(0.5)	1.0	0.15	(1.6)	0.65	0.3							
59							(7.8)	0.45	0.35							
60							(7.9)	0.7	0.45							
61							(4.6)	0.55	0.25							
62							(5.9)	0.65	0.35							
63							(3.6)	0.55	0.25							
64							(6.2)	0.6	0.3							
65							(3.9)	0.6	0.35							
66							(3.6)	0.6	0.45							
67										(1.6)	0.3	0.3				
68										(2.0)	0.25	0.25				
69			(8.1)				(6.9)	0.55	0.35	(1.2)	0.4	0.3				
70	20		(9.4)	(0.9)	0.9	0.2	7.2	0.6	0.3	(1.0)	0.6	0.3				
71							(4.3)	0.55	0.25							
72			(2.2)				(1.3)	0.6	0.25	(0.8)	0.5	0.2				
			刀子	全長	刃長	刃幅	刃厚	茎長	茎幅	茎厚						
73	20		(4.0)				3.5	0.75	0.3							
74	20						(6.9)	1.15	0.35							
75	20		(6.4)	(4.75)	1.1	0.25	(1.6)	0.65	0.2							
76	20									長辺2.4 短辺2.2 厚さ0.15						
77	20			(6.2)	1.35	0.55										
78	20						(5.4)	0.9	0.45							
			直刀	長さ	幅	厚さ										
79	20		7.2	2.1	0.3											
80	20		6.25	1.6	0.35											
81			4.4	1.0	0.45											
82	20		5.7	1.35	0.4											
83	20		6.2	1.75	0.7											
84	20・24	鐔	長辺	6.0	短辺	5.1	厚さ	0.45								

遺物 番号	図版 番号	器種	法 量 (cm)							() は残存値
		不明	長さ	幅	厚さ					
85			4.2	0.7	0.45					
86			8.5	0.6	0.4					
87			2.5	0.6	0.5					
88	20		11.9	0.7	0.55					
		鍔	長辺	短辺	厚さ					
96	22		1.8	1.25	0.2					
97	22		1.35	0.9	0.15					
98	22		1.45	1.05	0.1					
99	22		1.45	1.4	0.1					
100	22		3.6	1.5	0.2					
101	22		2.8	1.65	0.25					
		不明	長さ	径						
102	20		3.15	0.75						
103	20		3.2	0.6						
		鍔	手長	手幅	手厚	背長	背幅	背厚		
104	23		6.2	1.6	0.4	(2.1)	1.6	0.4		
105	23		6.4	1.6	0.55	(5.6)	1.5	0.3		
106	23		6.4	1.5	0.35	(3.0)	1.5	0.4		
107	23		6.2	1.5	0.3	(2.0)	1.5	0.4		
108	23		6.5	1.55	0.4					
109	23		6.55	1.65	0.45					
110	23		(5.0)	1.6	0.35	(2.7)	1.6	0.4		
111	23		(3.4)	1.55	0.35	(2.0)	1.5	0.4		
112	23		(6.4)	1.1	0.35					
113	23		(5.0)	0.95	0.3					
114	23		(3.6)	1.2	0.5	(1.5)	1.2	0.5		
115			(4.2)	1.0	0.55					
116	23		3.0	0.55						
117	23		3.3	0.75	0.5					
		鉄釘	長さ	径	頭径					
118	23		(16.2)	0.8×0.7						
119	23		(7.5)	1.0×0.95						
120			(2.3)	0.7×0.5						
121	23		(6.4)	0.5×0.5						
122			(3.5)	0.6×0.55						
123	23		(5.7)	0.5×0.45						
124	23		(6.9)	0.3×0.25	1.4					
125	23		(6.3)	0.45×0.4	1.4					
126	23		(3.9)	0.45×0.3	1.6					
127			(2.7)	0.35×0.35	1.35					

第5章 まとめ

今回の調査は、試掘により発見された削平された古墳の石室を対象としたもので、石室の調査としては高安古墳群のなかでは13例目となる。ここでは調査成果からわかった当古墳の概要についてまとめる。

当古墳の時期は出土遺物から6世紀後半（須恵器では陶邑編年のⅡ型式4段階頃）と考えられる。周辺の古墳では、愛宕塚古墳や芝塚古墳とほぼ同時期に比定される。出土遺物にはやや古相と思われる須恵器杯身が1点含まれており、これが混入でなければ時期がさかのぼることになるが、破片でもありその可能性は低い。また羨道部出土の杯蓋とした19は、やや時期が下り、7世紀初頭頃（Ⅱ型式6段階頃）のものと考えられ、追葬に伴う副葬品であろう。

これらの出土遺物には、羨道部壁際の土器を除いて、確実に元位置を保っていると考えられるものはない。それは玄室と羨道から同形態の有蓋高杯が出土していること、盗掘坑から出土した土器が石室内のものと接合されること、鉄刀の出土状況などから推察される。

装飾器台は、高安古墳群内では当古墳から南に約1.5kmに存在した箸塚古墳のものがある。馬・人物・小壺が付され、6世紀後半のもので、配像高杯形器台としては最も時期の下る資料とされている。この馬は鞍やたてがみ・耳が表現された写実的なものであるが、これらを省略した場合の形態が当器台の鳥とした小像に類似しているようである。鳥とした小像が馬の形骸化したものとすれば、当器台は箸塚古墳の器台より新しいと考えられ、また箸塚古墳の器台は鉢部に波状文を施すが、当器台はカキ目調整のみであり、これを省略化ととるならばその可能性は高いといえよう。

銀象嵌を施した刀装具は、高安古墳群内では芝塚古墳に次いで2例目となる。

埋葬については、木棺は平面・断面で痕跡が確認できたものは玄室部の2棺である。主軸に平行して並んでいる。この2棺については、東側にまとまって出土した副葬品を追葬の際の片付けによるものとするならば、西側の木棺2が追葬となる。緊結具が木棺2の範囲からのみ出土していることも、片付けの結果と考えることができる。鉄刀もその際に敷石を抜いて台石とし、その上に置かれたと考えるのが妥当であろう。

羨道部からは耳環が2組出土していることから2棺が納められていた可能性があり、西部で木棺の緊結具が出土している。また羨道南東部でまとまって出土した鋌頭を有する細身の鉄釘は、ここに小型の木棺が追葬されたことを示唆するものであろう。

耳環からは、玄室から1組、羨道から2組の計3組が出土していることから、最低3体の埋葬が考えられる。

当古墳の性格であるが、まず群集墳「高安千塚」の一支群として捉えることができる。独立墳とも考えられるが、今回のように分布調査では確認しえないような、削平され埋没している古墳が周辺に存在している可能性は否定できない。また北東部の丘陵頂部に位置する前期古墳－西ノ山古墳との関連から「楽音寺・大竹古墳群」の中で捉えることもできよう。いずれにしても今後の課題である。被葬者については、貴重品であったであろう装飾器台や銀象嵌刀装具を持っていることから、芝塚古墳と同様、有力氏族の首長クラスが想定される。

- 註1 八尾市教育委員会「10. 大石古墳（90-221）の調査」（『八尾市内遺跡平成2年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告22 1991. 3）
- 2 「高安古墳群の分布調査」（参考文献）では、無袖式の横穴式石室は5基が確認されているにすぎない。さらにこのうち2基は、高安山頂付近の高安山古墳群に属する終末期古墳（7世紀後半）である。
- 3 前掲書註1
- 4 この器台は事前調査において検出されている。
- 5 山田邦和「装飾付須恵器の分類と編年（下）－装飾付き須恵器の基礎的研究2－」（財団法人古代学協会『古代文化』第41巻第9号 1989）
- 6 土師器提瓶は大阪府羽曳野市切戸2号墳に出土例があり、類例をみないもので、この古墳と土師氏との密接な関わりを想定されている。
- 7 西山要一「古墳時代の象嵌一刀装具について」（日本考古學會『考古学雑誌』72巻1号）
- 8 前掲書註5

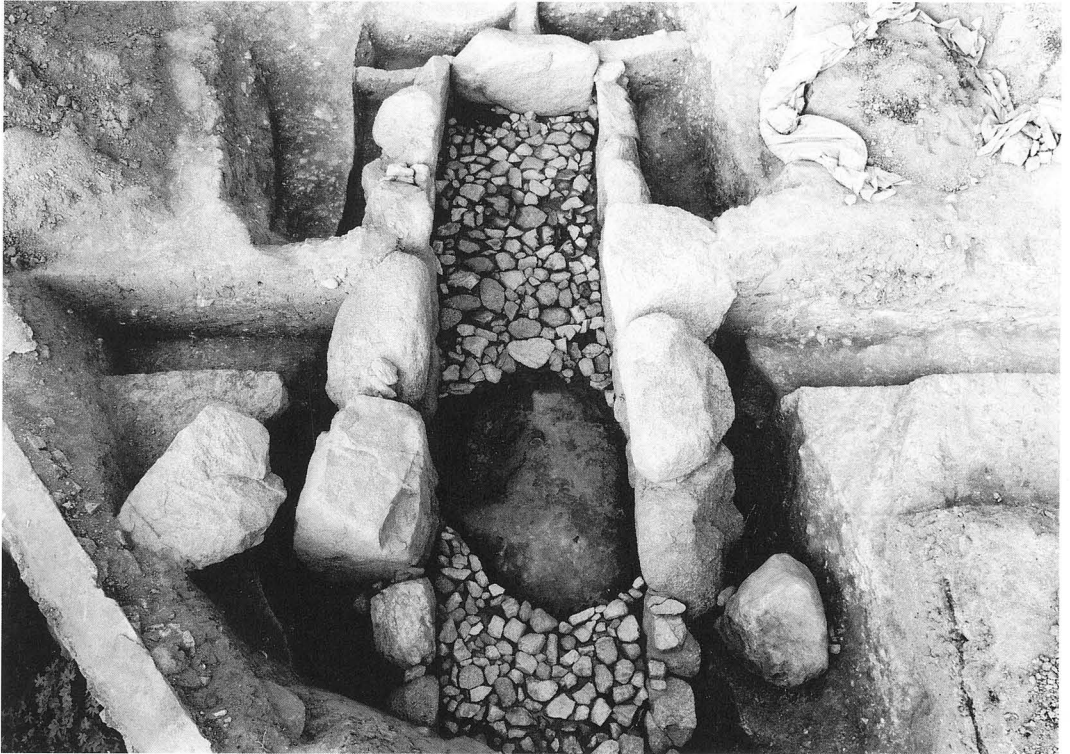
参考文献

- 羽曳野市教育委員会「古市遺跡群Ⅵ」1985 羽曳野市埋蔵文化財調査報告書10
- 杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」（橿原考古学研究所『橿原考古学研究所論集第8』1988）
- 高安城を探索会「高安古墳群の分布調査」1990. 8
- （財）八尾市文化財調査研究会「高安古墳群芝塚古墳」1993（財）八尾市文化財調査研究会報告38

追記

脱稿後、韓国国立晋州博物館学芸研究室 金斗喆氏に、当古墳出土の鞍（92～95）を実見して頂く機会があり、新羅形式のものに類似するとの御教授を得た。

版 図



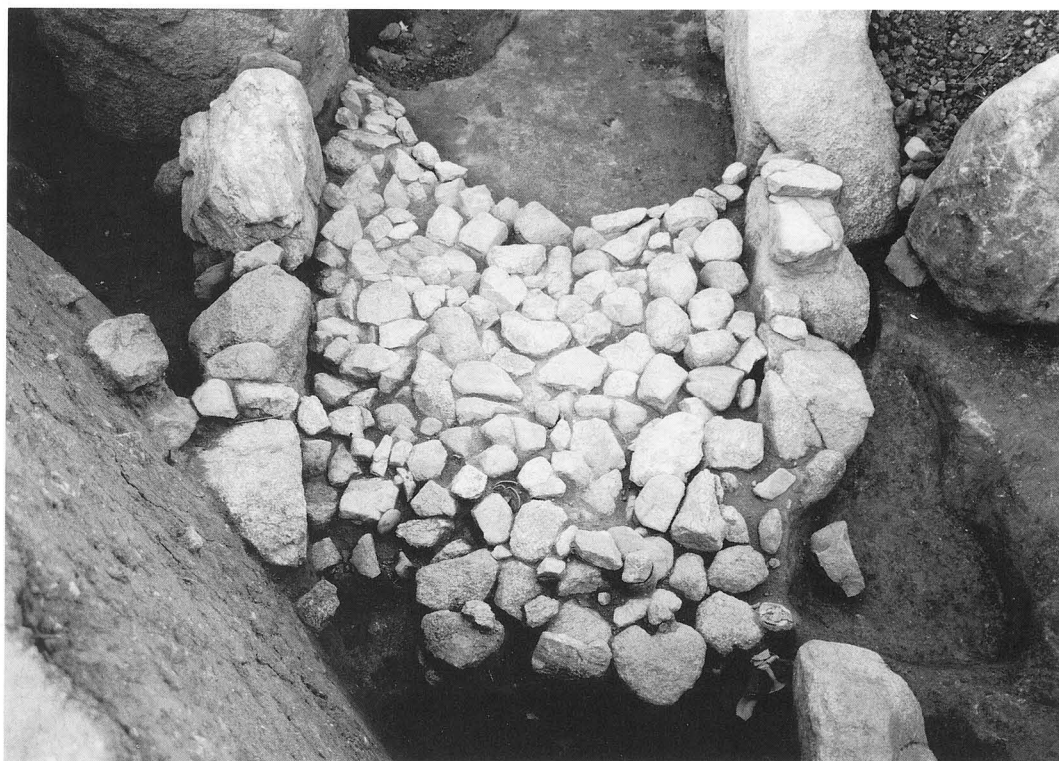
石室全景（南西から）



石室全景（南西から）



玄室敷石（南西から）



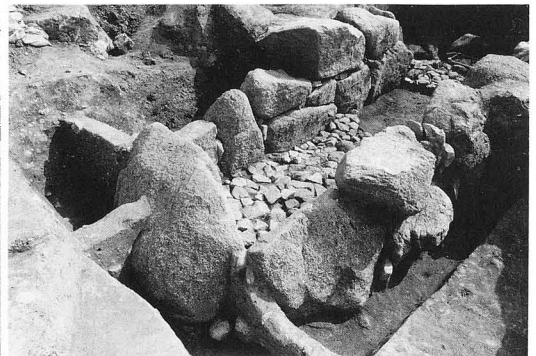
羨道敷石（南西から）



敷石除去後石室全景（南西から）



奥壁（南西から）



石室（北から）



玄室西側壁（南西から）



玄室東側壁（南西から）



玄室西側壁北部（南東から）



玄室東側壁北部（北西から）



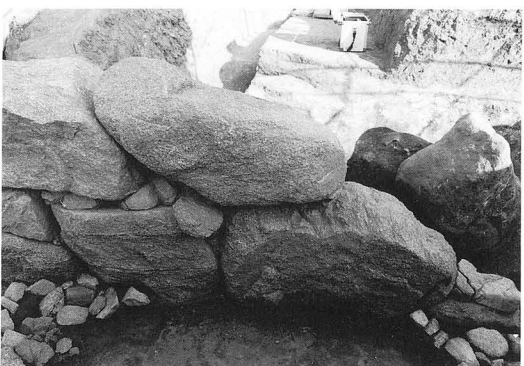
玄室西側壁南部（南東から）



玄室東側壁南部（北西から）



玄門西側壁（南東から）



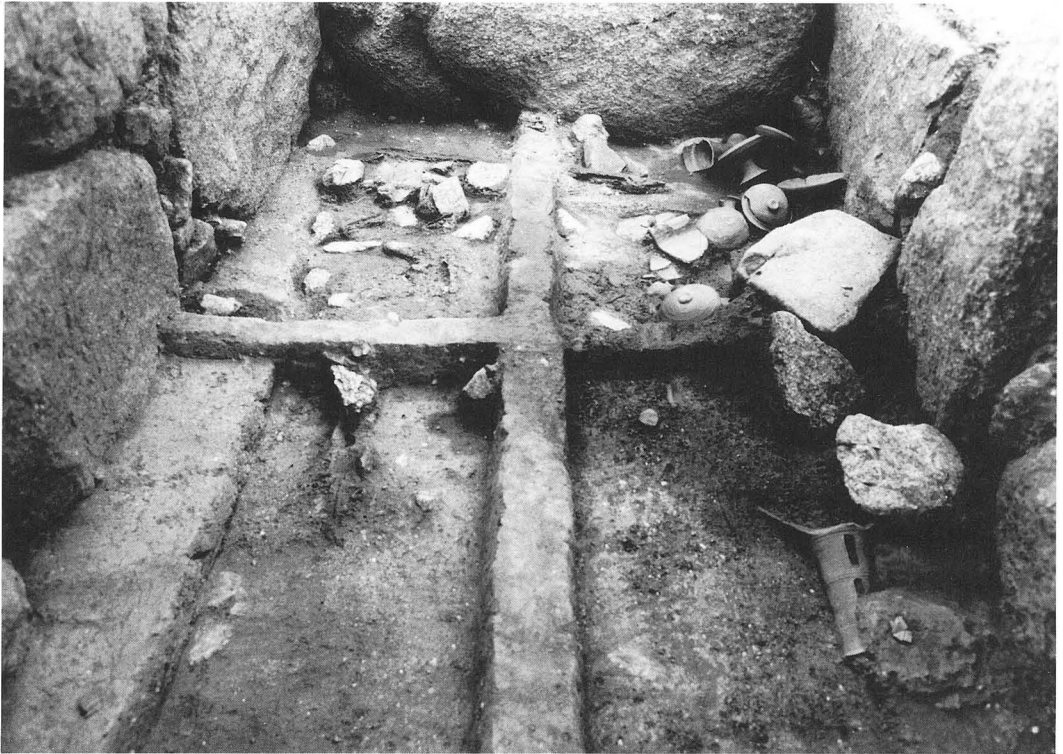
玄門東側壁（北西から）



玄室西側壁裏（北西から）



玄室東側壁裏（南東から）



玄室遺物出土状況（南西から）



玄室木棺検出状況（南西から）



玄室遺物出土状況（南西から）



玄室遺物出土状況（西から）



玄室遺物出土状況（西から）



玄室遺物出土状況（北東から）



玄室北東部遺物出土状況（上が北西）



玄室中央東部遺物出土状況（上が北西）



玄室遺物出土状況（南西から）



玄室遺物（14・91）出土状況（上が南東）



玄室遺物（89）出土状況（上が南東）



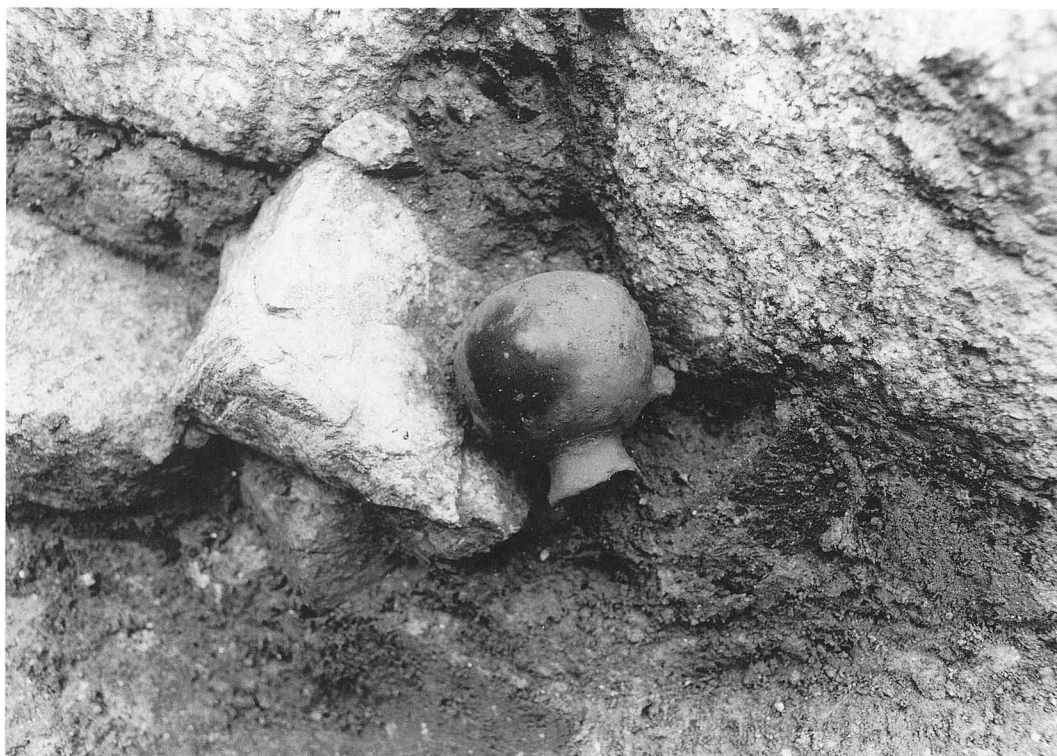
玄室遺物（17・82～84）出土状況（上が北西）



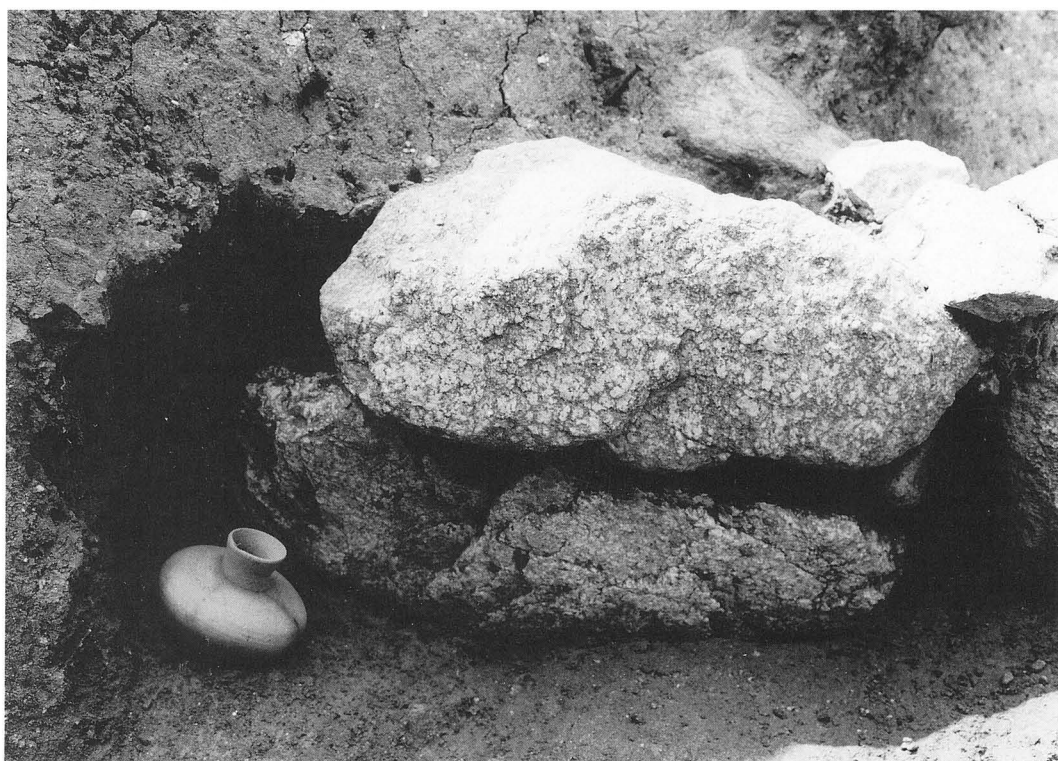
羨道遺物(36)出土状況(北から)



羨道遺物出土状況(北東から)



羨道遺物（32）出土状況（南東から）



羨道遺物（30）出土状況（南東から）

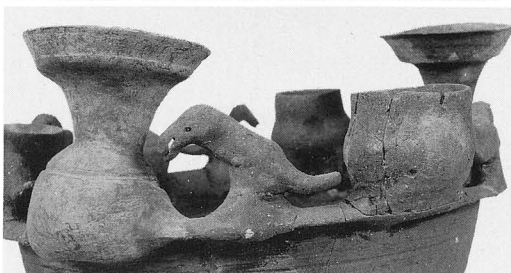
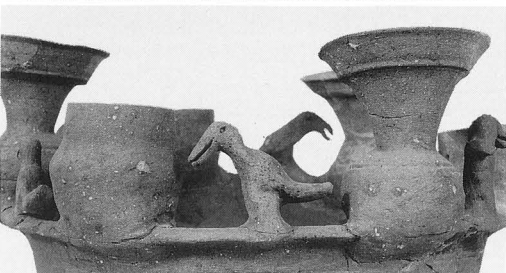


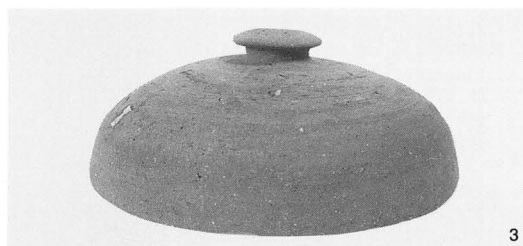
玄室遺物出土状況復元（西から）



3 トレンチ全景（南から）



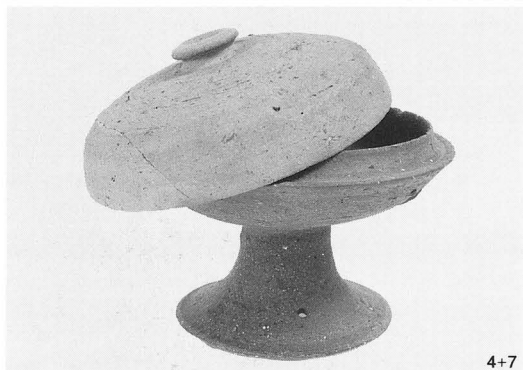




3



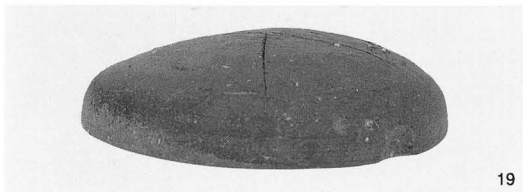
2+5



4+7



8



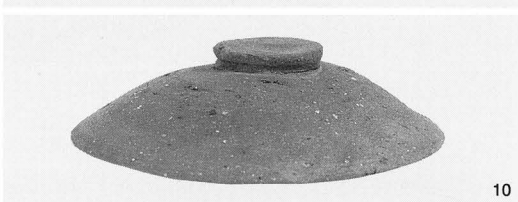
19



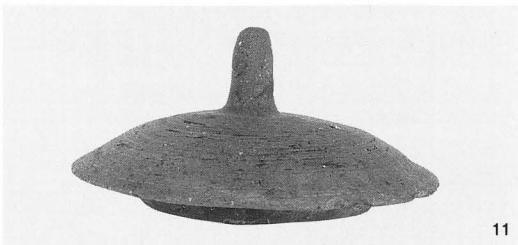
6



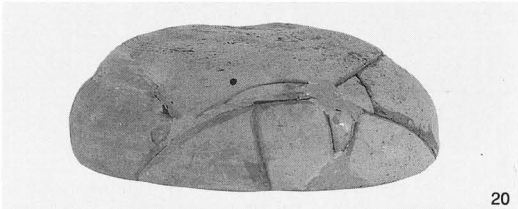
23



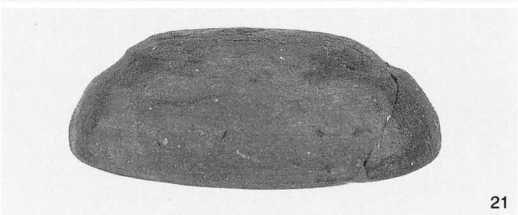
10



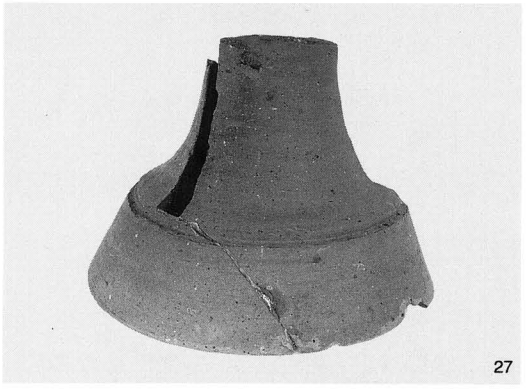
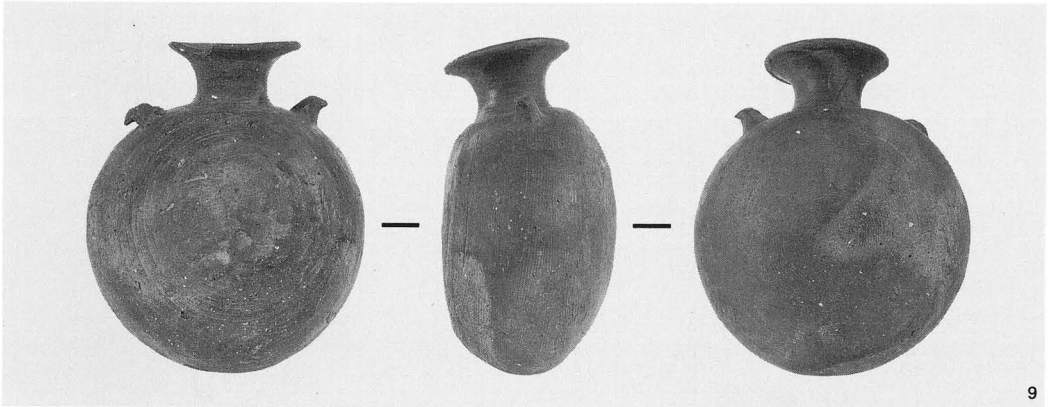
11

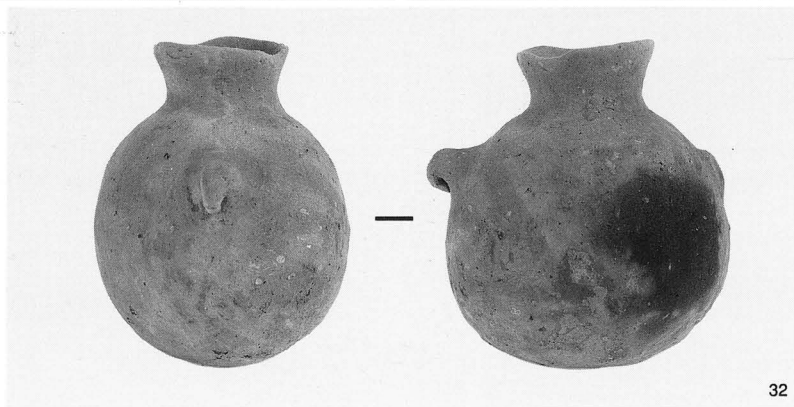
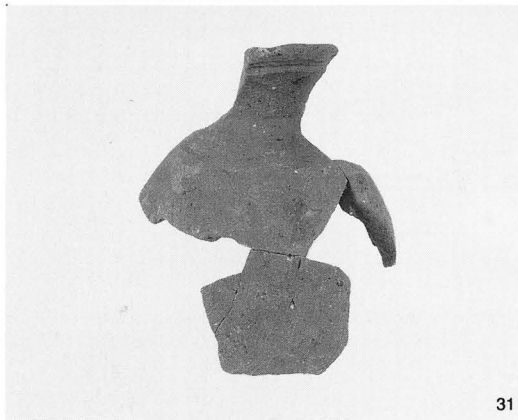


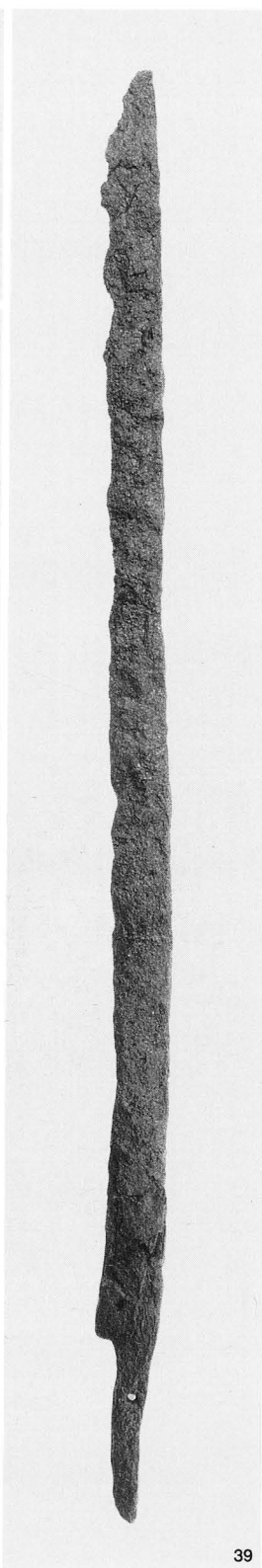
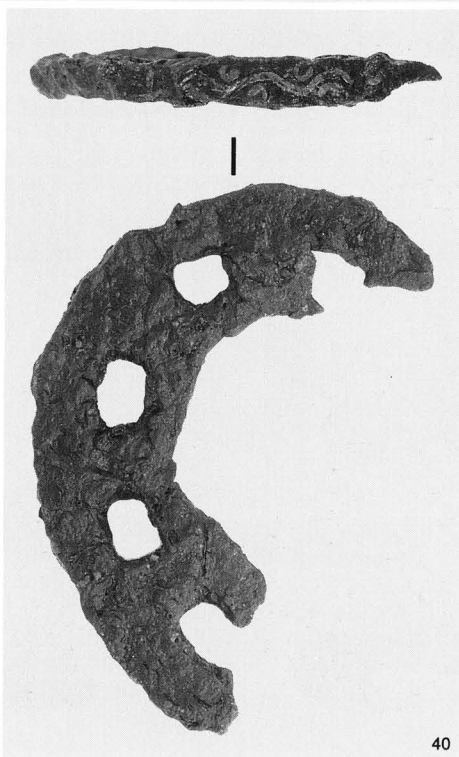
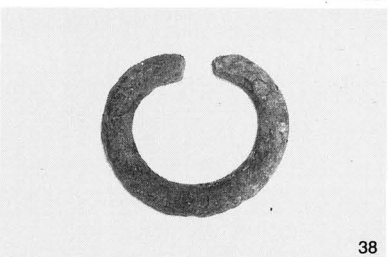
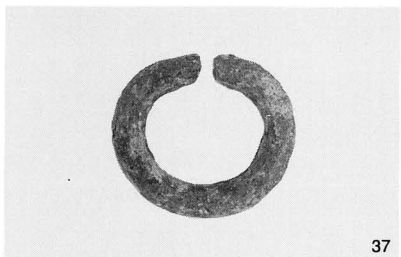
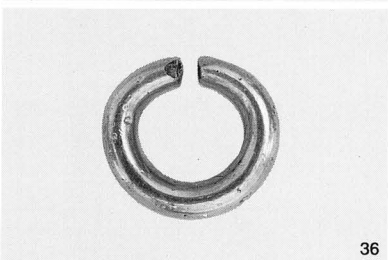
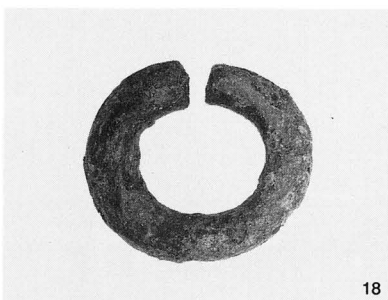
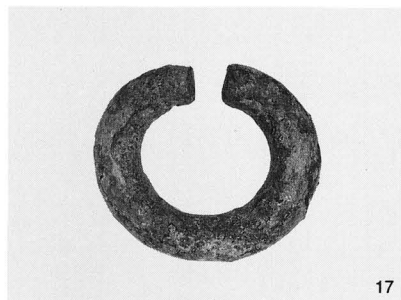
20

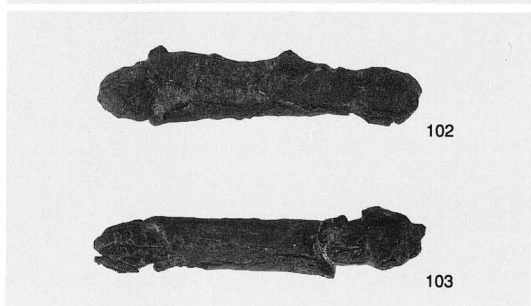
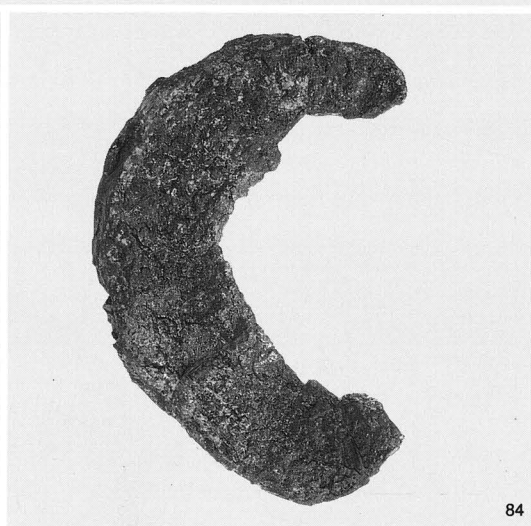
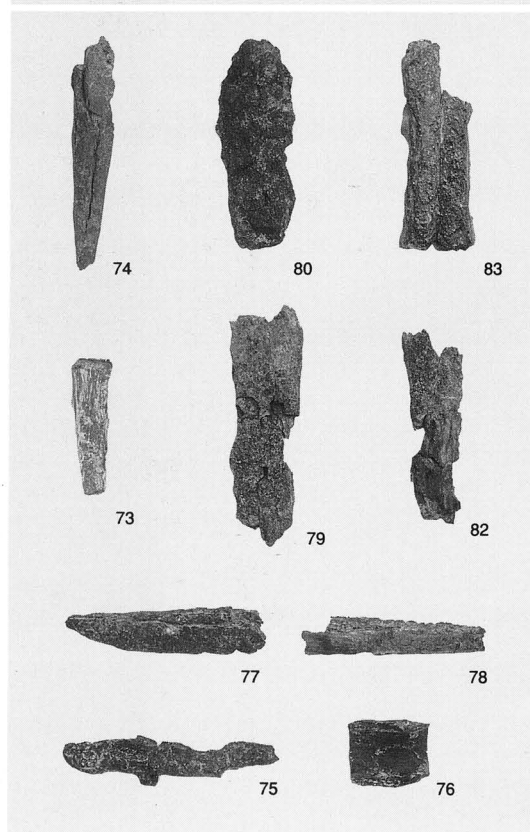
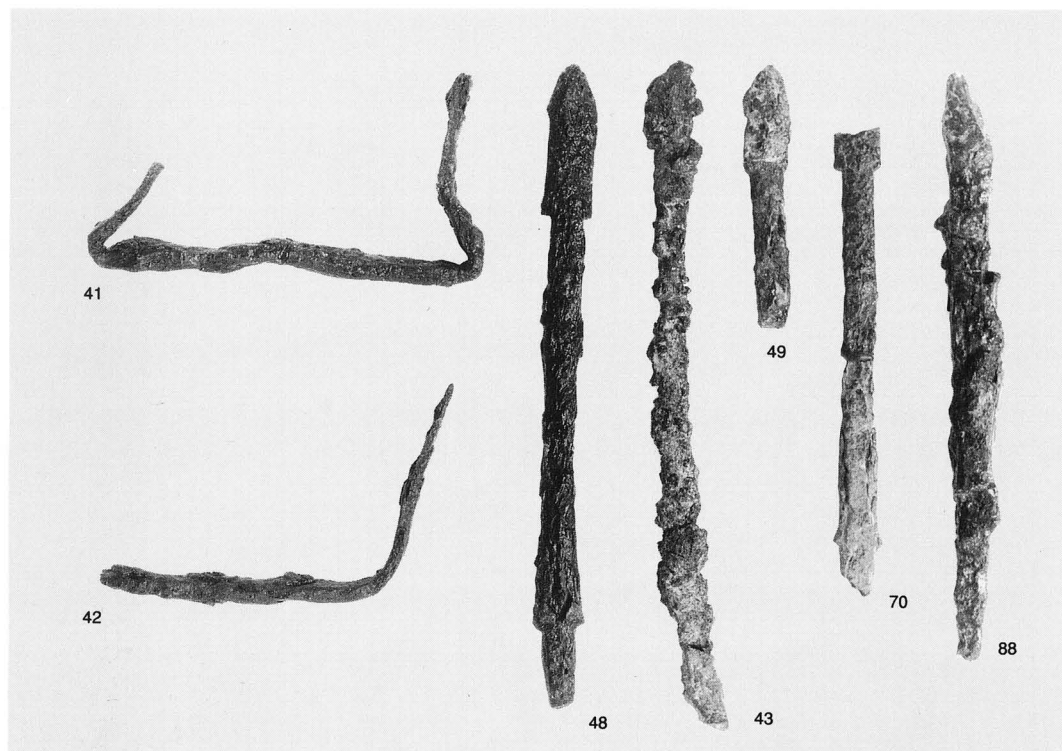


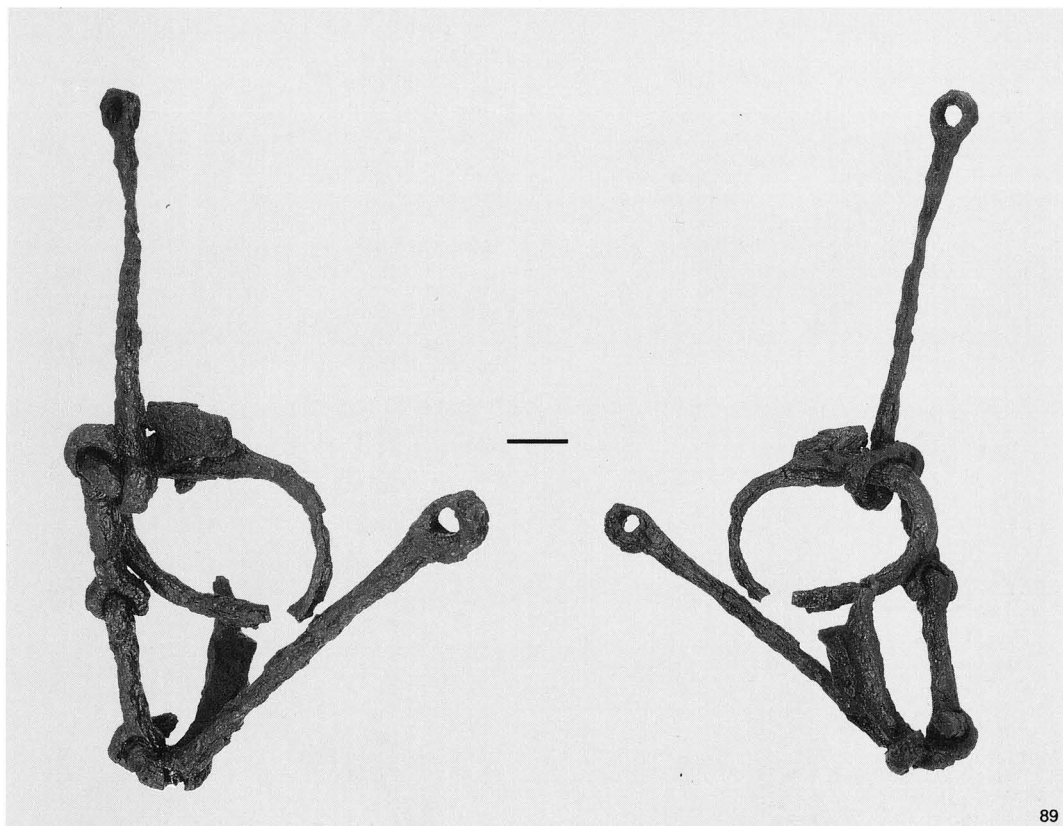
21



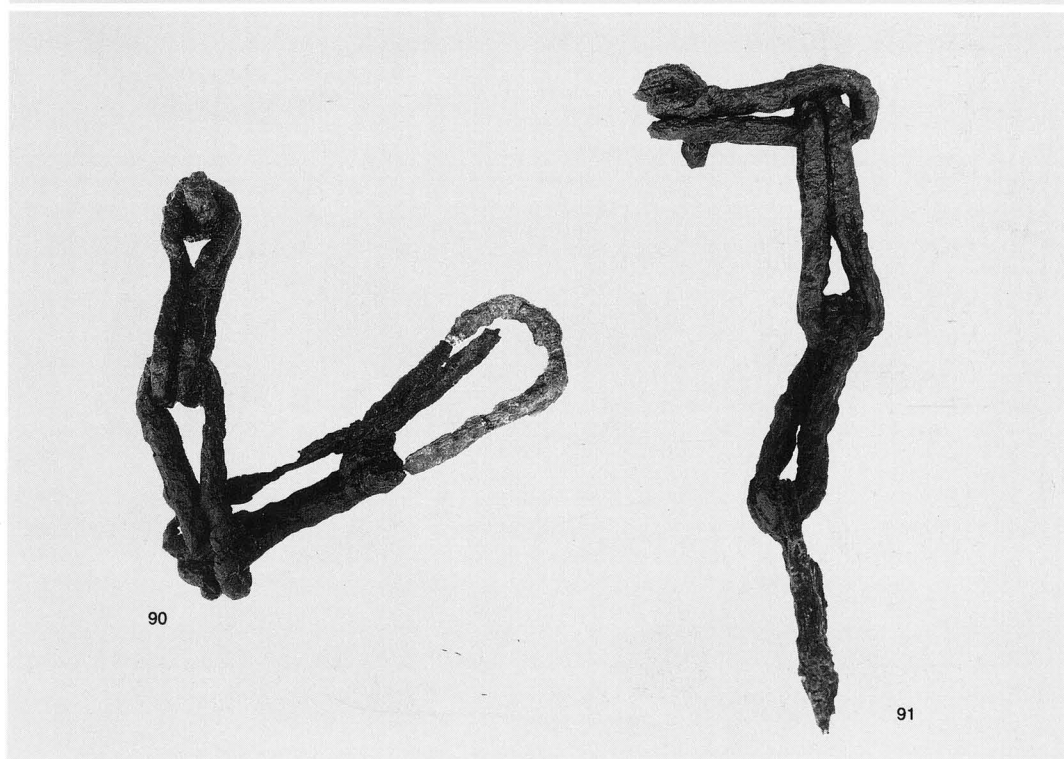






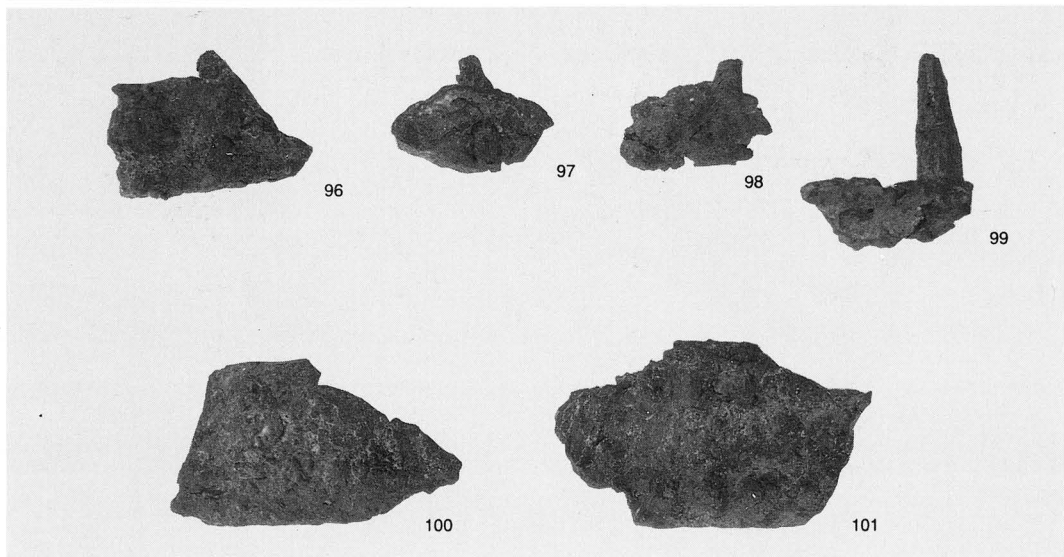
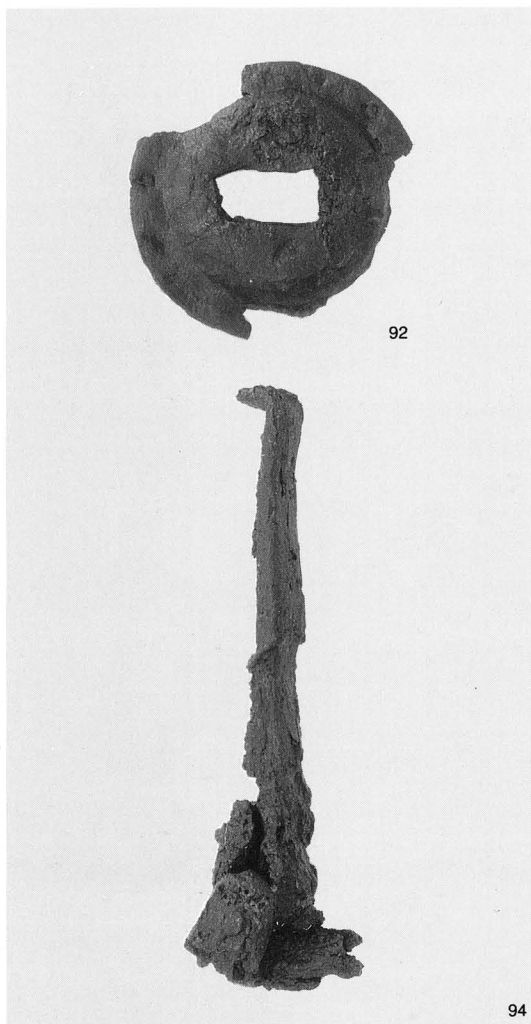


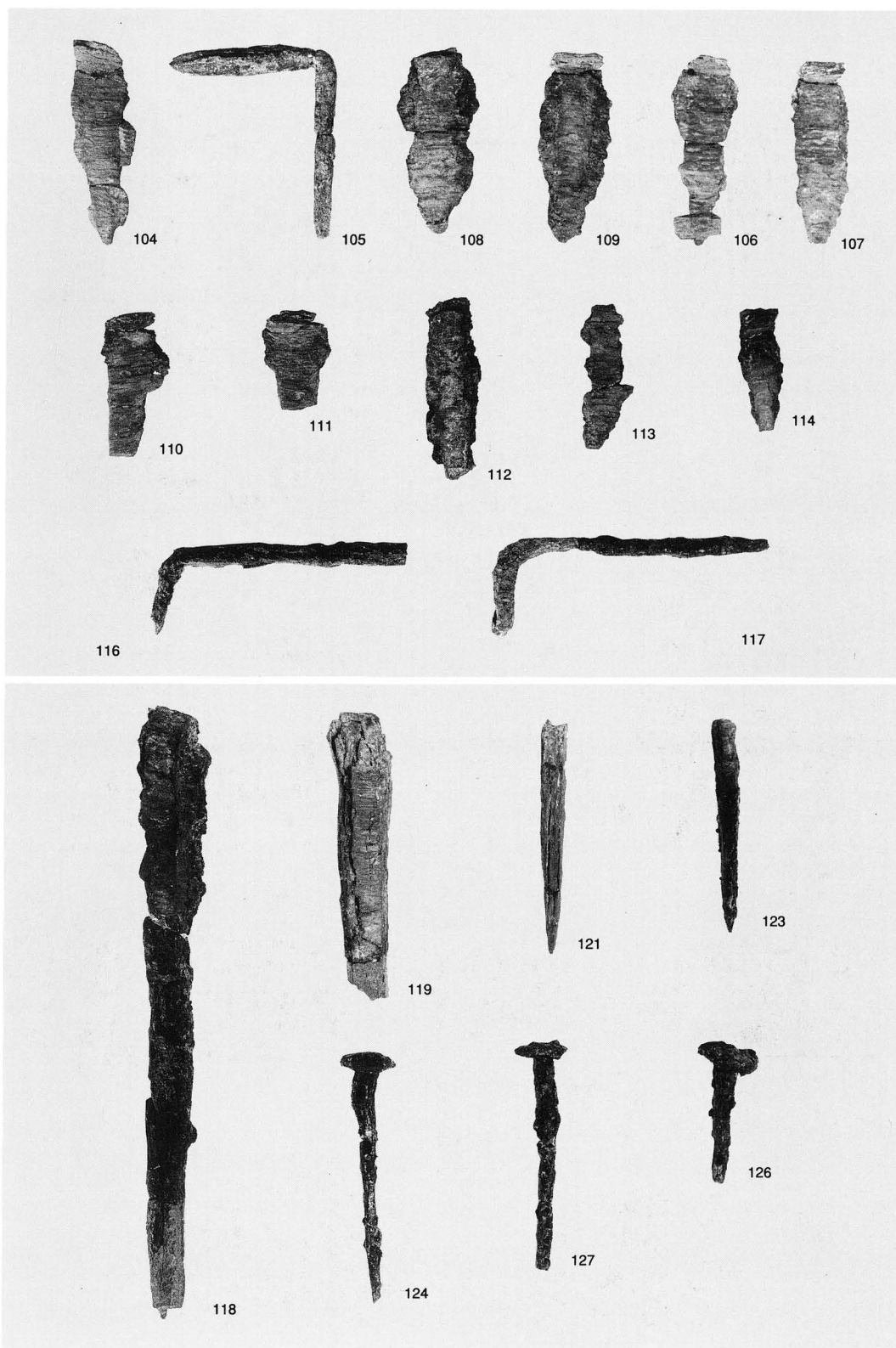
89

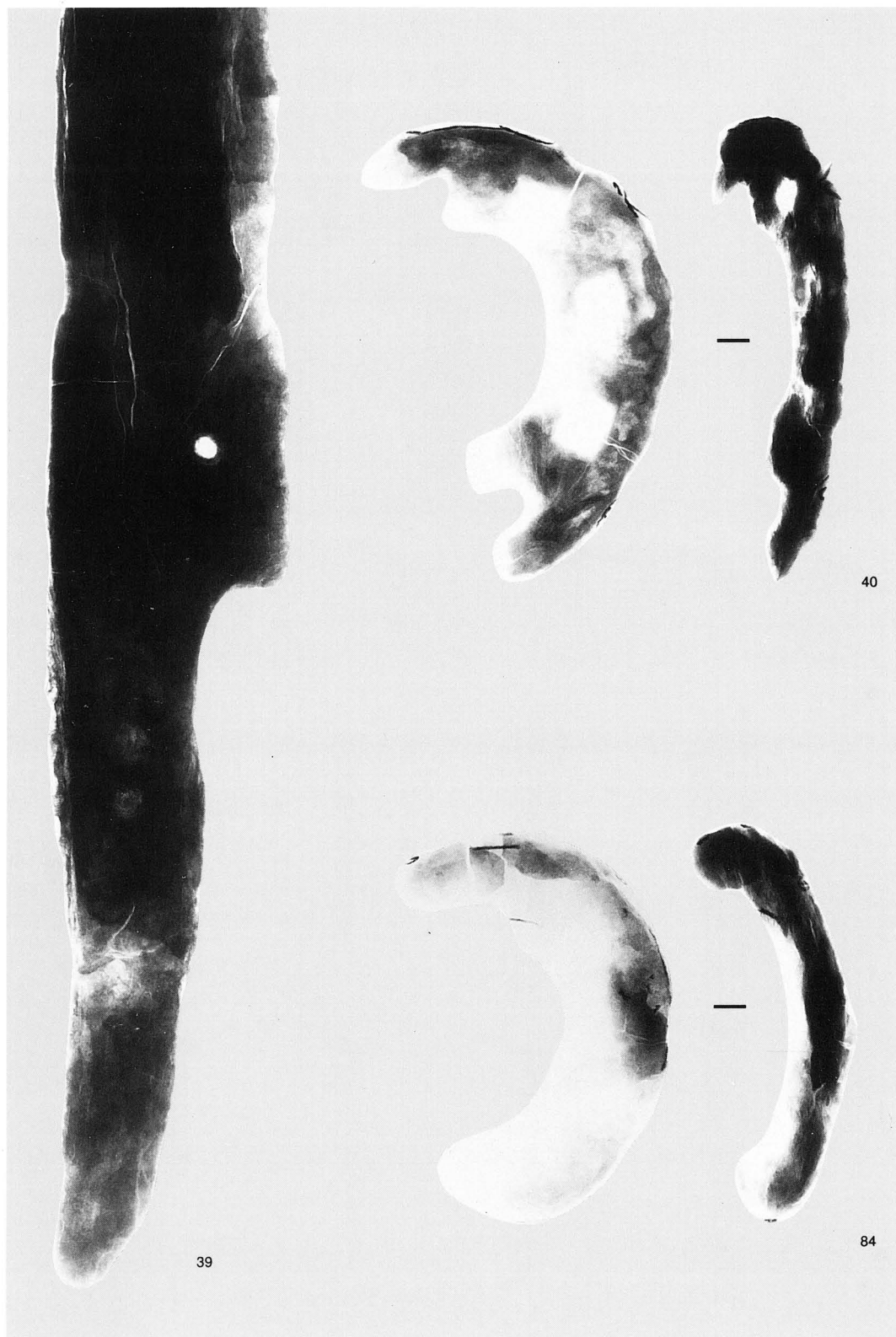


90

91







報告書抄録

ふりがな	たかやすこふんぐん おおいしこふん							
書名	高安古墳群 大石古墳							
副書名								
巻次								
シリーズ名	(財)八尾市文化財調査研究会報告							
シリーズ番	44							
編著者名	坪田真一							
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会							
所在地	〒581 大阪府八尾市青山町4丁目4番18 TEL 0729-94-4700							
発行年月日	西暦 1995 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかやすこふんぐんおおいしこふん 高安古墳群大石古墳	おおきふ や おし ぐんぐん 大阪府八尾市築音寺6丁目29	27212		34度 38分 19秒	135度 38分 49秒	19900807～19900903	80	学生寮建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
高安古墳群大石古墳	古墳	古墳時代後期		横穴式石室		須恵器装飾器台 土師器 鉄刀・鐏 馬具	銅に象嵌あり	

(財)八尾市文化財調査研究会報告44

高安古墳群

大 石 古 墳

発 行 平成7年3月

編 集 財団法人 八尾市文化財調査研究会
〒581 大阪府八尾市青山町4丁目4番18号
TEL0729-94-4700

印 刷 (株)近畿印刷センター

表 紙 レザック66 <260kg>

本 文 書 籍 用 紙 <90kg>

見 返 し 上 質 <90kg>

色トビラ 色 上 質 厚 口

057